

## 研究論文

## 「わたくし語り」とドストエフスキー

『未成年』を現象学的社会学の目で読む

佐藤 嘉 —<sup>1)</sup>

“I-Story” and F. Dostoevsky  
 — Reading “ (A Young Adult)” from Phenomenological -  
 Sociological Point of View —

SATO Yoshikazu

In this paper the author would like to take up a Fyodor Dostoevsky's novel, *A Young Adult* as a typical type of “I-Story” (“Ich- Roman”). While reading it from phenomenological - sociological point of view, the author will try to make clear the reason why Dostoevsky used a style of “I-story” in order to construct the novel, *A Young Adult*. The author insists here that, whenever asking the reason why a social issue happened, one would usually not only make a scrutiny into the external conditions under which the issue was produced, but also the internal motives of actors who committed themselves to the issue. However, one would not often take notice that there appears somewhat different meanings on one and the same issue, whether one faced the issue from actor's point of view or from observer's point of view, even though one had made rigidly a scrutiny into both the external moments and the internal moments of the issue. The author exhibits that it is a basic attitude of phenomenological sociology that interprets the events of social world from actor's point of view, and that Dostoevskian method of “I-roman” seems to be essentially equal to that of phenomenological sociology. And the author tried to make out some figures in this paper — such as a *triadic scheme* of *mind, body and other* in their relation to the process of life (figure 1) and a *triadic scheme* for *discursive categories*, that is, *communication, expression and description* for analyzing “I-Story” (figure 2) — which will be helpful to us, if one would try to understand the structures of everyday life world from the eyes of an actor or actors, even though in this paper the author defined himself only to understand *A Young Adult*.

**Key words** : Dostoevsky, I-roman, young adult, mind-body-other, communication-expression-description, intemacy-isolation, self-identity, phenomenological sociology, consociate, typification, contemporary, institution

**キーワード** : ドストエフスキー, わたくし語り, 未成年, 精神・身体・他者, 伝達・表現・叙述, 親密性・孤立性, アイデンティティ問題, 現象学的社会学, 直接世界, 類型化, 共時世界, 制度

---

1) 立命館大学産業社会学部

## はじめに

### 1 「わたくし語り」

ドストエフスキーの長編小説に『未成年』(1874/75)がある。この小説はわが国では最初『青年』と題して訳出されたが、今日では前述どおり『未成年』である。英語圏におけるドストエフスキー文献を瞥見すると *An Adolescent* および *A Raw Youth* の二つの表記が見出される。「青年」か「未成年」か。Adolescence (青年期) と Adult (成年期) の間に「未成年期」Young Adult を識別するのは、エリクソンである。未成年期の固有課題は「社交における親密な関係への近づきと孤立」にあるとする彼の準拠枠をもってすれば、ドストエフスキーの小説の題名はやはり「未成年」が適切であろう。

ところで『未成年』は、小林秀雄がだいぶむかし『『未成年』の獨創性について』(1933)において指摘しているように、「わたくし語り Icherzählung」の小説である。ドストエフスキーの「わたくし語り」は『未成年』以前にも『死の家の記録』(1862)『地下室の手記』(1864)や『賭博者』(1866)の中に、その後は『ある作家の日記』(1872/81)の中にも認められる。『未成年』が唯一例外のころみではない。むしろドストエフスキーは一人称の叙述、「わたくし語り」を多用する作家である。

問題はドストエフスキーがなぜ、なんのために「わたくし語り」を多用したのかである。ドストエフスキーにとってそれは小説を形づくるために「不可欠な形式」なのだろうか。それともM・バフチンがいうように「単なる表面的な小説の構成上の手続き」<sup>1)</sup>にすぎないのだろうか。もし前者であるなら、その形式はいかなる「リアリティ」に親和して、反対にいかなるリアリティになじまないのか。例えば「個人のアイデンティティと社会」の問題にとって『未成

年』の「わたくし語り」はいかなる意義をもつのだろうか<sup>2)</sup>。

事柄を考える場合、この長編小説のために準備したドストエフスキー「『未成年』創作ノート」(1874-1875)が参考になる。まず小説の「主題」にかかわって「創作ノート」(1875.3.22)の一部を引用してみる。

いろいろな事実。だれもがそばを通り過ぎるのに、これらのことに気づくものはいない。市民らしい市民はひとりもないし、だれもみづから進んでこれらに関与したり、考えたり、気づこうともしない。わたくしはこれらの事実から目をそらすことができなかつた・・・わが国の社会には土台がなく、また規範が根づいていない。生活もなかつたからである。大変動が起こり、すべてが断絶し、崩壊し、否定されてしまった。それも西ヨーロッパにおけるように外見だけでなく、内面的、道徳的にこれが起こつたのである。・・・わたくしが誇りにおもうのは、自分がロシアの多数者の真の姿を最初に描き、その奇怪で悲劇的な側面をはじめて暴いたことである。・・・わたくしひとりが地下室の悲劇の主人公を登場させたのだ。悲劇は苦悩と自責であり、よりよいものを意識しながらそこには到達できないと思うこと、またなにより肝心なことは、これら不幸な人々は、みんなそうなのだから更生の必要などなにもないとすっかり思いこんでいることである。いったいながこのような人たちを支えうるだろう。報酬か、信仰か。報酬はだれからも与えられず、信仰する対象もないとしたら。(工藤精一郎・安藤厚訳『未成年』創作ノート108頁-109頁。傍点は筆者。)

### 2 ロシア社会の大変動と「地下室の悲劇の主人公」

「大変動が起こり、すべてが断絶し、否定されてしまった」と記されているように、十九世

紀後半ロシア社会は急激な大変動を経験する。ヨーロッパを震源地とする新しい商品市場経済システムの波がロシアの広大な大地に到達するや、旧い農業国ロシアは一挙に流動化し始める<sup>3)</sup>。都市部には「資本主義」(商業・工業・金融・交通・運輸業などの非農業部門の諸事業)の急展開がみられ、伝来の農村部では「農奴制」の廃止など、社会・経済・政治・法制上の制度改変の波が急襲する。ロシア全土におよぶ圧倒的多数の農民階級の生活は窮迫(農民層の分解)し、都市部への人口移動、大量の無産者と被「恤救民」<sup>じゆっきゅうみん</sup>の発生を結果する。社会組織の基本単位である「家族」にも異変が生じる。旧いロシア社会の経済的社会的土台は急速に解体し、<身分>的社會秩序、「ツァーリズム的家産制」の変容と無定形化を結果する。

変動は社会の外部においてのみ生じたのではない。ロシア人の内面的・道徳的な領域の深部におよぶ断絶と亀裂。「昨日のロシア」を「明日のロシア」へと繋ぎとめる<現在>の父親たちと子どもたちの間の精神的相剋。文化の伝達帯としての「ロシアの家族」に遍在する「アノミー」。十九世紀のロシアにおける急激な社会的経済的変動と文化的道徳的無規制状態の現出に伴う、新しいタイプの人間の発生。ドストエフスキー流に言えば「地下室の悲劇の主人公」の顕在化である。旧ロシア社会の家産制的身分秩序の急激な崩壊と共に浮かび上がる「地主貴族的エートス」の申し子、身分境界線上に噴出する「マージナル・マン」、アルカージイ(私生児)問題がその一つである<sup>4)</sup>。

### 3 ドストエフスキーの「創作ノート」

どのような「方法」(手段)が『未成年』の問題にとって有効であるか。ドストエフスキーの手になる「創作ノート」がただちに目に留まる。<わたくし語り>の方法が「創作ノート」で吟味される。

「問題の重要な解決。一人称の語りで書くこと。わたくし、という言葉ではじめること」(『未成年』創作ノート」邦訳 二九頁)。

「もしも、未成年<わたくし>を語り手として書くのでないなら、次のような手法にすること。即ち、未成年を主人公にしてびったり離れず、小説のはじめではずっと彼から目を離さないようにする。従って、例えば、公爵夫人も、彼も、伯母さんたちの境遇も、ドルグーシンたちも、すべて彼らが順次未成年と関係をもってくる、きっちりそのかぎりだけで、叙述される。うまく行くかもしれない」(同「創作ノート」邦訳 三四頁)。

「もしも作者の立場からの叙述にしたら、興味を引くものになるだろうか?・・・一人称か、あるいは作家の立場からか。未成年が語る物語のほう配列がより独創的なものなる。あるディテールから他のディテールへと跳び移ってゆく。この配列のなかに彼自身の性格が現れる。しかし、それは章単位とする。一人称のほう独創性があり、愛がある。芸術性ももっと要求される」(邦訳 五一頁 傍点は筆者)。

以上の叙述からさらに検討してみなければならぬ二つの問題が見えてくる。第一に、作品『未成年』の<意味>世界とロシア社会の<現実>の問題とのかかわりあい<sup>5)</sup>。第二に、小説の方法としての「一人称による語り」問題である。前者は『未成年』の「主題」選択の特質、後者はこの主題への接近「方法」の特質をそれぞれ検討することである。

### どのように『未成年』を読むか

#### 1 三部・三十二章・百二十八節の長編小説

ここで『未成年』の物語を一瞥する。物語は三部構成である。第一部では、村の世襲所領地から首都ザンクト・ペテルブルグに移り住む没落地主貴族ヴェルシーロフ家の複雑な家庭事

情、特に実父ヴェルシーロフ・アンドレイ・ペトローヴィッチと息子の「わたくし」ドルゴルーキー・アルカージイ・マカーロヴィッチの間の相剋、「わたくし」の重要な他者たち、社交相手 老公爵、若公爵、モスクワ時代の級友、女地主のタチヤナ叔母さん、異母兄姉、実妹、高利貸し、若い技師など の来歴やエピソードなどがわたくしによって語られる。第二部では、父親ヴェルシーロフの複雑に屈折した行動や思想の諸相 古い地主的な生活様式と「人民の友」的な進歩思想の混じり合い 伝統的ロシア正教の信仰に生きる農奴あがりの実母ソフィアの忍従、二人の奇妙な夫婦関係、元公爵夫人カテリーナ・アフマーコワに対するヴェルシーロフの激情の秘密、カテリーナの「手紙」をめぐる「わたくし」と夫人とのもつれた「親密」な関係、ヴェルシーロフの二人の娘たち（実妹リーザ・マカーロヴェナと異母姉アンナ・アンドレーエヴナ）の恋のいきさつ等が「わたくし」によって語られる。物語の終局部である第三部にはアルカージイの法律上の父、巡礼者マカール・ドルゴルーキーが登場し、この美しい魂の持ち主の臨終と実父ヴェルシーロフやその周りの人々との対照的な生き方の結末が描かれ、わたくしの親密圏での「人間関係」の亀裂や無秩序が浮き彫りされる。

『未成年』は「わたくし」が経験した九日間の行為的現実の「記録」である。しかし「わたくし」の主観的意味の世界としてこの行為的現実を理解すれば、それはわたくしらしさにかかわるかけがいのない時間意識の諸体験のシリーズであり、さらにこの行為的現実が社会変動の最中にある混乱した姿のロシアの都会的生活者の現実構成でもある。いわばわたくし語りという「存在」の意味変換（理解）が、三部あわせて三十二章、百二十八節の物語の産出となる。

## 2 「盤根錯節」

ところで『未成年』の従来の批評であるが、

世人の評価はあまりかんばしくない。『未成年』のプロットが「盤根錯節」であるという作田啓一氏の指摘はこうした批評のひとつである。『未成年』は勸善懲惡のように簡単に筋が掴みがたいという見解である。

「難しい漢語をつかうなら盤根錯節ともいべき『未成年』のプロットを形容するに相応しい入り組んだ文体である」（作田啓一『ドストエフスキーの世界』二八〇頁）。作田啓一氏は『未成年』のテーマを「父と子」「教養小説」および「同時代の社会の無秩序」の三つのテーマに整理し、それぞれのテーマの内容を詳しく検討している<sup>6)</sup>。しかしこれらの検討から導き出される結論は、たとえばアルカージイを主人公とする「教養小説」とみる限り、「この作品は成功作とは言えない」、「教養小説を描く基本的なパースペクテヴとしての『自己完成』の理念そのものをドストエフスキーは疑っている」（同書、三一九頁）である。また「性格小説」や「劇的小説」の視点からみても『未成年』は完成度が低く、ドストエフスキーの「五大長編小説の中で最も迫力の乏しい作品であるという印象を一般の読者に与える」（同書、三一九頁）と論評される。類似の批評をこれ以上引用する必要はあるまい。

ところで『未成年』を「無秩序」や「アノミー」をテーマとする小説である<sup>7)</sup>。つまり作田氏も指摘するように、「『未成年』はロシア社会の混乱を、トルストイやゴンチャロフの秩序ある世界との対比において描こうとした作品であるとみることもできる」（同書三一八頁）という理解に立つなら、その全体評価はどうなるだろうか。「盤根錯節」は小説が本来かかえ込む、避けがたいテーマの材質そのものにならないだろうか。

問われるべきは、「無秩序」という意味の「盤根錯節」のテーマをドストエフスキーはどのように描き、いかなる視点からこれに光をあてているかにあるのではないか。「視点」の

「不安定さのために『未成年』はドストエフスキーの長編小説の中で最も読みにくい作品」（三一九頁）になっていると断定できるだろうか。テーマが孕む「盤根錯節」と視点の「盤根錯節」とは峻別されるべき事柄ではないだろうか。「盤根錯節」する（？）この長編小説のように、「読み方」それ自体の省察を読者に要請する小説は滅多にないことだけは確かである。

### 3 ドストエフスキーの「自然的態度の現象学」

ドストエフスキーが「『未成年』ノート」に記しているとおり、『未成年』は「わたくし」（物語の主人公であるアルカージ・マカーロヴィチ）が体験し見聞した周辺世界の物語（意味構成）である。「未成年が語る物語のほうが配列がより独創的なものになる」、「あるディテールから他のディテールへと跳び移ってゆく」、「この配列のなかに彼自身の性格が現れる」（傍点は筆者）。ノートとの関わりで『未成年』の第一部、第二部、第三部における第一章第一節の冒頭部分の記述を以下に引用してみる。

「わたしは自分を抑えきれなくなつて、人生の舞台に乗り出した当時のこの記録を書くことにした」（『未成年』 11）「わたしはこの記録を昨年九月十九日から書き起こすことにする」（同上； 12）「わたしはここで、二月ほど先へとぶことになる。わたしははっきりと十一月十五日という日を記しておこう」（同上； 11）「今度は、まるで別の話だ」（同上 11）

第一の印象は、その恣意的な書きぶりである。「あるディテールから他のディテールへのジャンピング」。「時間」「場所」「登場人物」「出来事」など、物語の「主題」がすべて主人公の「わたくし」の視座と関心によって「きうちりそのかぎりだけ」（ドストエフスキー）選択される。「周辺」に出来る小さな、あるいは大

きな事件、自殺、財産争い、債券偽造、賭博、老い、病死、背任、狂った情念の奔出などへの関心。そして「わたくしの内部」へと沈降する、これらの出来事についての反省、追想や想像。即ち夢想、隠された欲望、不如意な理想、肉親との確執。母や妹への同情等々。わたくしの他者への「働きかけ」や「構え」（「行為」や「態度」）に関連する限りで、ぴったりその限りでの「ディテールからディテールへ」の移り行き。生の過程としての「わたくし」。このディテールの「配列」（「意味連関」）を通して「わたくし」の「性格」、「アイデンティティ」があらわれる。

百二十八節もの全「ステージ」上に万遍なく常時登場する「わたくし」とその「時間意識」の諸転変。ジグザグに進行するこの物語の「通奏低音」<sup>パッサ・コンテニューオ</sup>をひき出すとすれば、このわたくしの「時間意識」という持続音である。この小説はその構えにおいて「自然的態度の現象学」の立場、人間理解の方法としての「個人本位の方法」（マックス・ヴェーバー）が貫徹される。観察者による人間観察の客観的説明の方法よりも、むしろ状況のなかに身をおいて他者との折り合いをつけようと努力する行為者（主人公）のまなざし優先の方法論である。十九世紀のロシアのある家族の出来事をアルカージ・マカーロヴィチという一人の青年の語りをとおしてあきらかにすること。ドストエフスキーがトライする、そのための意味構築の技法。「しかし、それは章単位とする」である。

こうして『未成年』を読む方向が定まる。「視点と準拠枠」に留意し、「わたくし」のアイデンティティ、「わたしってだれ？」という問いをドストエフスキーと共に解き明かすことである。ロシア社会の「アノミー」状況を生きる「わたくし」の意味世界を「ドストエフスキー」の叙述に従って「再」構成することである。

### 言語(説)化された「わたくし」の社会的世界

#### 1 「いま・ここ」の自 - 他関係

##### (1) 直接世界

「ご気分は如何と思ひまして」とわたしはまっすぐマカール・イワーノヴィッチのそばへ歩み寄りながら、いった。「ありがとう、おまえを待っていたんだよ、きつときてくれると思っていたよ！昨夜おまえのことを考えていたのでな。」「それで、如何ですか？」タチャーナ・パーヴェロヴェナは急に医師の方をむくと、心配そうに肩をひそめて、こう結んだ。「それがさっぱり寝台に寝たがらないでこうして座り、自分を苦しめてばかりいるんですよ。」「なに、こうしてちょっと、みんなと座っているだけだよ」と子供が許しをこうような顔をして、マカール・イワーノヴィッチはぼそぼそといった。(『未成年』 23)

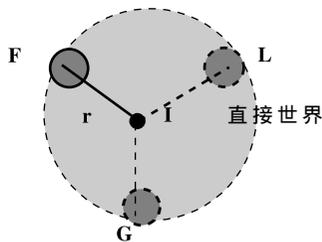
わたくしとその重要な他者(複数) マカール老人、タチャーナ叔母、ヴェルシーロフ、母、妹のリーザ、医師などがマカールの病室で交わしている会話である。図1において「他者」(F)は「わたくし」(I)から一定の距離(r)のところ居合せている。マカール・イワーノヴィッチ(F)は「ベッドに座り込んでいる一人の老人」として「わたくし」といま、ここを「共同生活」している。マカール老人、タチャーナ、母、医者 など他者(F)と「わたくし」(I)は時間と場所とを共同にする

「直接世界」に生きている。「わたくし」と「共同に生きる」この他者(F)に少しこだわってみよう。

##### (2) 「他者」(F)のあらわれ(現前)

「わたくし」は直接世界において発話者の一人であり、同時に複数の他者F(マカール、タチャーナ、医師、リーザ、ヴェルシーロフ)を眼下にみる観察者でもある。わたくしの<まなざし>にはいま「寝台に座っている病人」としてのマカール老人(F)がみえる。しかしFはすぐ後には「けんめいに杖にすがって、立ち上がる」と試み、「『そら立ったぞ』と、にこにこ笑う」老人でもある。他者(F)は「わたくしのパースペクティヴ」(「時間的パースペクティヴ」現在の「いま」を中心にさっきの今、過去のいまとこれからの今、未来のいまの双方向に広がる)と「空間的パースペクティヴ」わたくしの「ここ」から「そこ」への遠近法的に広がる)と「間柄的パースペクティヴ」「親しい人」の間柄(われわれ関係)から見知らぬ「他人」(彼ら関係)に至る「社会性」の親疎によって「異なる」あらわれ方(意味や形)をしめす。

ふいに太陽の光線が差し込んで、マカール老人の顔をぱっとまともに照らし出した。話の間にも機械的に、幾度となく頭をわきのほうへかした。母は、もう幾度も心配そうに窓をみやった。母はマカール老人の腰掛けていた足台を、ちょっと右手へずらせようとした。とふいに、リーザがマカール老人に



- F : 他者 (マカール、その他)
- G : 精神 (わたくしのところ)
- L : 身体 (わたくしのからだ)
- I : わたくし (生の過程)

図1 他者・身体・精神

向いてこういうのが聞こえた。「まあ、ちょっとでも腰をお上げなさいよ。お母さんが、どんなに骨折っていらっしゃるか、あなたにはみえないんですの？」老人はちらと素早く彼女に視線をなげると、たちまち合点がたって、大急ぎで体を起こそうとしたが、結果はなにもならなかった……「だめだよ、お前」と、リーザを見つめながら、妙に哀れっぽい声で彼は答えた。……マカール老人はありたけの力で、松葉杖に寄りかかったかと思うと、いきなり体をもちあげて……「そうら、たうたよ！」と、よるこばしげに微笑しながら、ほとんど得意然として彼はいった。「ありがとう、リーザ、よい分別を授けてくれた。もうまるでこの足が役に立たんかと思っておったよ……。」けれど、……これだけのことをいうかわないかに、全身の重みをもって寄りかかっていた松葉杖が、どうした弾みか絨毯をすべった。しかも『足』はほとんど彼を支えていなかったで、彼のからだはいきなり棒倒しにどうと床へ倒れた……」（『未成年』 2 4: 新潮 下 一五五頁～一五八頁傍点は筆者）

F（マカール老人）の形姿はわたくしのとる可変的な展望のもとに「いま」と「ここ」において豊かに現前する。ドストエフスキーがここに描出するのは直接世界 一般に「具体的な状況」と呼ばれる、「いま」と「ここ」における現象としての他者像である。

### (3) 他者問題の基点

マカール老人の言動に関するドストエフスキーの記述は「他者とはなにか」という問題、他者問題に関する一つの解答である。「わたくし」(I)にとってマカール(F)はさしあたり「直接世界」におけるその「立ち現れ」(徴候充実した姿)である、と。マカール老人(F)はもちろん「わたくし」(I)がそこに居合わせようと居合わせまいと、「わたくし」とはなんの関わりもなく「世界のなかに永續」する。し

かしそれにもかかわらず、マカール老人(F)のしかじかの意味的あらわれはつねにもっぱら「わたくしのパースペクティブ」と相関するのだ。しかも面对面における「他者」マカール老人の立ちあらわれ(意味措定)は一種独特である。マカール老人は生き生きと認知され、再認知され、修正変更され、ある意味で「類型化」を許さない。豊かな徴候充実した姿である。

「わたくし」が「いま・ここ」を時間的、空間的に超脱、分散し、自在に浮遊するにしても「ファンタジーの世界」や「思い出の世界」や「理想の世界」をわたくしが生きるにせよ ゆっくりと、あるいはたちどころに、再び立ち戻る基点は「いま、ここ」の直接世界にほかならない。ドストエフスキーの「わたくし語り」にとって「直接世界」は物語の再三の「出発点」であり、同時に再三再四の「終着点」でもある。

## 2 「わたくしの身体」(L)と「わたしの精神」(G)

いまここに「共にある他者」の問題について一言したのは、ドストエフスキーの「わたくし語り」小説の根幹、「他者」の意味的構成という基本問題にかかわるからである。

「わたくし語り」は「わたくし」(I)の「まなざし」をいわば準「拠点」にして浮かび上がる「図柄」としての「他者」像に着目するアプローチである。特殊な意味での「現場主義」、<sup>リファレンス・ポイント</sup>「今ここ」のパースペクティブの相のもとに「他者」を「把捉する」現象学的他者理解の企図である。「行為者の見地」の徹底化である。

### (1) わたくしにおける「わたくしの身体」のあらわれ

リーザはブロンドだった。明るいブロンドで、髪は母にも、父にも全く似なかった。だが、目と、卵形の顔は母にそっくりだった。鼻筋はまっすぐにとおって、小さいけれど、ただしい格

好をしていた。・・・わたしとはまるで似たところがなく、それこそ相反する両極ともいうべきであった。(『未成年』 61)

行為者の見地を行為者自身に適用する場合、「わたくし」(I)における「わたくしのからだ」(L)の「あらわれ」は「わたくし」(I)における「他者」(F)の「あらわれ」と同じであろうか。「わたくしのからだ」(L)のほうにわたしの「まなざし」を向ける場合、わたくしの「手足」など、からだの一部はたしかにわたしの視界のうちに入る。しかしその「鼻筋」や「眼」の近傍は鏡などの道具を用いることなしに「視界」に入れることはできない。「わたくしのからだ」(L)にたいする展望の一定不変性というこの「あらわれ」の特徴は、「わたくしのからだ」(L)が「世界の中にあるもの」(ケルバー)「他者のからだ」を含めての展望の可変性にたいして一種独特である。もう一つ重要なことは、からだの「わたくしにおける永続性」である。生きている限り行住坐臥、寝ても覚めても、つねに「わたしのからだ」(L)はわたくしと共にある。他者のからだは見えも隠れもするの、Lは「わたしにおいて永続」する。その他の「もの」が「世界において永続」するのと対照的である。

メルロー＝ポンティがいう<sup>8)</sup>ように、からだのあらわれが「展望の可変性」および「世界における永続性」によって特徴づけられるとすれば、「わたくしのからだ」(L)の「あらわれ」はこの二つの契機を否定してしまうのだからからだ(Body)のあらわれ一般には解消されないだろう。「わたくしのからだ」(L)は「他者」(F)とは区別されうるし、また区別しなければならぬ一個の独自の「あらわれ」であるといわねばならない。

## (2)「わたくしの精神」(G)のあらわれ

リーザはわたくしの右まえにこちらを向いて座った。彼女はなにやらさしせまった心配ごと

があって・・・不安そうな、いらいらしたような顔をしていた。そのときふと私たちの目が合った。とたんにわたしは、『ぼくたち兄妹は二人とも汚辱にまみれている。こちらから彼女に近づいて行ってやらなくちゃいけない』と腹の中で思った。わたしのところは急にやわらいだ。(『未成年』 24: 新潮 下 一四五頁～一四六頁)

「わたくしのところ」(G)が「わたくしのからだ」(L)から区別されることはわたくしの生活(I)に準拠するかぎり難しいことではない。「健全な精神」と「健全な肉体」、「このころの状態」と「からだの状態」は実践的には容易に区別できる。「わたくしのところ」(G)の状態をわたくしは直接ありありと思ひ浮かべることができる。「腹の中で思った」や「わたしのところは急にやわらいだ」などの言説がそれである。面白いことにわたくしにはFの表情が「まるみえ」でありFの「からだの状態」も実に委細を尽くして言説化できるのに、その「ところ」がわからない。もっぱらFの表情、しぐさや言動をとおしてFの「ところ」を知るのである。反対にわたくしの「表情」はまるで「みえ」ず、ひたすらその「ところ」を情感して得心するのである。

他者の身体の動きの仔細な描写に反比例するこのころの扱いのぞんざいさ。わたしのこのころの動きの仔細な描写に反比例する身体の扱いのぞんざいさ。パースペクテヴが「補完的」(レンプロカル)なのである。

## (3)生としての「わたくし」

以上に識別したいいま・この「他者」(F)・身体(L)・精神(G)のアド・ホクな状態を一つに束ねる磁力の中心に「わたくし」(I)がある。「わたくし」(I)は「いま・ここ」において確かに「定まってあり」ながら、同時に「いま・ここ」をたえず「超脱する」という意味において「独特な」存在である。

「わたくし」(I)は<sup>レベ</sup>生命であり、その本性において過程である。「わたくし」は生命の誕生からその終わりまで、あらゆる「いま、ここ」に生き、たえずしかし「いま、ここ」を超越して生きる。「状況に拘束されつつ状況を越えて」存続する一個の生の過程である。

「わたくし」(I)は「固定した構造」ではない。回転し続ける「<sup>コ</sup>独楽」のように、いのちあるかぎり、「たえず構造化されつつ構造化する」流動する生の過程である。「わたくし」(I)は「他者」(F)と「身体」(L)と「精神」(G)を介して「いま・ここ」の「直接世界」を生きる「諸関係の軸心」である。

以上述べたことを図にまとめると「図1」のようになる。「わたくし」(I)を軸心とするいま、このF・L・Gの<sup>トリアド</sup>三幅対が織りなす円形軌道の回転の軌跡こそ『未成年』の「わたくし語り」の骨格を形成する<sup>イデオ</sup>基本理念でなければならない。

### 3 「わたくし語り」のコンポジション

#### (1) 「わたくし語り」の三類型

「いま、この自 - 他関係」の問題の出発点に戻ろう。以上に述べた準拠軸、すなわち「他者」F、「わたしのからだ」L、「わたしのこころ」Gの三極に留意してドストエフスキーの先の「わたくし語り」を吟味すると三つの「言説」形式に類別されることに気づく。即ち「」の引用符で括られる言説(Aカテゴリ)、『』の引用符で括られる言説(Bカテゴリ)、そして引用符のない「わたくし」の言説(Cカテゴリ)である。

##### i) 「伝達」としてのAカテゴリ

例えば「ご気分は如何と思ひまして」、「ありがとう、おまえを待っていたんだよ、きつときてくれると思っていたよ！昨夜おまえのことを考えていたのでな」「それで、如何ですの？」「さっぱり寝台に寝たがらないでこうして座り、

自分を苦しめてばかりいるんですよ」など、「」付きの<sup>スピーチアクト</sup>発話行為がAカテゴリに属しよう。

これは「いま、ここ」の面前で繰り広げられる自 - 他の間(F - L)の会話である。「対面の状況」におけるわたくしと他者の間の意思の「伝達」行為である。Aカテゴリの発話は「だれが、だれに、なにを」について特定可能である、一種の「プロトコール命題」の性質を帯びる。発話の順位、回数、「<sup>フレクエンシ</sup>頻度」等に「計数化」でき「ソシオメトリー」化も可能である。

Aカテゴリの言説の特徴は「伝達」という言語機能にある。目前の話し手が伝達する(措定する)意味を聞き手は「伝達された意味」として「聞き取り」(解釈し)、つぎにこの聞き手が「話し手」となって伝達する(措定する)意味を、先の話し手は「聞き手」となって「伝達された意味」として「聞き取る」(解釈する)。「意味」の相互伝達 - 被伝達の関係、意味措定と意味解釈のシークエンス。「」の引用符はこの伝達の発話行為の<sup>ユニット</sup>単位記号となる。Aカテゴリの言説は他者(F)への「<sup>ヴィルケン</sup>影響」、Fへの働きかけを「目的」もしくは「理由」の<sup>プログラム</sup>動機にもつ「社会的行為」(ヴェーバー)、実践的行為の意味的現実である。会話における伝達の「思念される(主観的)意味」と「解釈される(客観的)意味」の間の間隙とズレが出来事の「ドラマ」を生む。

##### ii) 「表現」としてのBカテゴリ

<とたんにわたしは『ぼくたち兄妹は二人とも汚辱にまみれている。こちらから彼女に近づいていってやらなくちゃいけない』と腹の中で思った>(『未成年』 23) 『なあに、なんでもないさ、いまにすぎしてしまうだろう！したらぼくはもとどうり元気になれるさ！なにかで埋め合わせをしよう・・・なにかいいことをして・・・ぼくの前途にはまだ五十年も人生があるのだ！』(『未成年』 105) <『う

ちのひとは一度だってこんなに上手になおしてくれたことなんかないのよ』と主婦は良人に当てつけをいった>(『未成年』 61) 「あなたはあの岩をご存じですね・・・皇帝が何度も馬車で通られたが、そのたびにその岩が目についた。そしてとうとう癩癩をおこされた。・・・『あの岩をなくせい!』鶴の一声ですよ」(『未成年』 2)

みたところ引用文における『』は、それぞれ異なっているように見えるが、いずれも発話者による「わたくし」であれ、他者であれ「思い」や感情の表白であるという点で共通している。「わたくし」の妹に対する「思い」は「わたくし」の自分自身にたいする「思い」は「ある妻」の夫に対する「思い」は他者の話のなかの「第三者」の「思い」の「表白」であるといえるだろう。

これらの言説はもっぱら「こころの動き」、「こころのあらわれ」に対する関心にある。叙情詩が「心情」の形象化へと志向するように、Bカテゴリーは相手の存在とは無関係に、ひたすら「自己の表現」に向かう。このカテゴリーの言説は「伝達」による「他者への働きかけ」(F L)を目的とするよりも、むしろ語ること自体を目的とする。いわば「表現」としての言説である。働きかけるプラグマ（実践的行為）よりも、自己の「態度（アインシュテルンク）」表明に力点がおかれる。「伝達」的言説としてのAカテゴリーにたいして、この言説は人格の「主観的表現」のカテゴリーと呼びうるであろう。伝達の

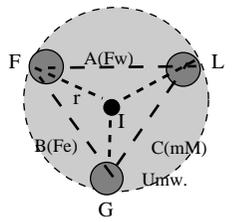
言説が「プラグマチック」な客観的效果をもつのにたいして、表現の言説は「感情励起的」効果をもつ。前者は「社会的」「社交的」「関係的」であり、後者は「個人的」「私的」「自己表現的」である。Bカテゴリーを言説形式にもつ「自-他関係」を「他者にたいする働きかけ」(Fw)のAカテゴリーから区別して、「他者への態度」(Fe)と呼ぶことができる<sup>9)</sup>。

iii) 「叙述」としてのCカテゴリー

第三番目の「」や『』のいずれの引用符も付かないCカテゴリーは、AとB以外の「残余カテゴリー」である。雑範疇についての積極的な定義づけはことばの意味からして背理である。さしあたり次のような事例をあげる。

- (ア) からだの状態についての報告 <わたしは頭がすこしきずきして>、(イ) 心的態度についての報告 <わたしの理想はロスチャイルドになることである、ロスチャイルドのような富豪になることである> <わたしはもうずっとまえから結婚したいと思っていた> 等等
- (ウ) 他者との出会いについての報告 <それはちょうどわたしが、はじめてめぐり会った日なのである>
- (エ) 他者の行動の観察 <リーザはさっと赤くなったが、なにも言わないで、ただわたしの目をまともに見据えた> 等 などである。

Cカテゴリーはいわゆる小説の「ト書き」（レギールベメルクンク）と通常よばれる言説に対応する。「わたくし語り」の地（ヒンターグルントザッツ）の文である。(ウ)や(エ)は他者や他者の行動についての「わたくし」の観察の報告的「叙述」である。(ア)や(イ)はわ



- A カテゴリー (Fw) F L (伝達)
- B カテゴリー (Fe) F G (表現)
- C カテゴリー (mM) G L (叙述)
- Umw.: 直接世界

図2 <わたくし語り>の言説構造

たし自身のこころの状態やからだの状態についての説明的「叙述」である。これの「報告的」叙述および「説明的」叙述は、自 - 他のコミュニケーション関係、即ち、「他者に対する働きかけ」や「他者に対する態度」の前後関係（意味連関）を明らかにするうえで重要である。当面このカテゴリーをまえの二つのカテゴリーから区別して「わたくしの所見」(mM)とよぶことにしよう。以上を図で示せば、図2のような $\overline{FL} = A$ カテゴリー、 $\overline{FG} = B$ カテゴリー、 $\overline{GL} = C$ カテゴリーからなる「三幅対」の直接世界における「わたし語り」の言説構造の図が得られる<sup>10)</sup>。

(2)「わたくし語り」のユニットとしての「章」

つぎに、以上に示した「わたくし語り」の「言説構造」に従って『未成年』の組成についてもう少し立ち入って調べてみよう。表4は『未成年』におけるA、BおよびCカテゴリーの使用の頻度を128節全部にあたって得られた結果である。

百二十八節のうち Aカテゴリー（「」の引用符付きの発話）の頻度がゼロ（ $f=0$ ）かつBカテゴリー（『』の引用符付きの発話）の頻度がゼロ（ $F=0$ ）、すなわち「わたくし」の所見（「Cカテゴリー」）のみで構成される節が17（13%） $f(n)$ かつ $F(0)$ 、すなわちAカテゴリーの発話で主に構成される節が39（31%）

$f(0)$ かつ $F(n)$ すなわちBカテゴリーの発話で主に構成される節が14（10%） $f(n)$ かつ $F(m)$ ただし $n \neq m$ とするすなわち「どちらかといえばAカテゴリー」の発話が支配的である節が51（40%） $f(m)$ かつ $F(n)$ すなわち「どちらかといえばBカテゴリー」の発話が支配的である節が7（6%）という結果である。

「主にAカテゴリーによる構成」と「どちらかといえばAカテゴリーによる構成」を合わせると90節、全体の節の約7割（69.8%）

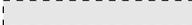
が「」引用符付きの発話形式、つまり「いま、ここ」の直接世界における「会話」場面によって『未成年』は成り立っていることになる。もちろん「節」によってはCカテゴリーのみ、BやCカテゴリーのみといったケースもみられるが、『未成年』はAカテゴリーの発話形式がその他の形式にたいして明らかに支配的である小説である。これはなにを意味するだろうか。

『未成年』は、「ひとり語り」の長丁場の物語ではあるが、決して筋のない物語ではない。「わたくし」のまなざしにうつしだされる「盤根錯節」の人間模様をi)「伝達」の言説によってミクロな「会話」の意味的世界として形象化し、ii)「表現」の言説によって発話者の自己「表現」の世界を押し広げるほか、さらにiii)「叙述」の言説によって自 - 他関係の社会的背景、他者の表情やしぐさ、「わたくし」の内面の動機の屈折などにも光をあてる。ドストエフスキーはいわば「ミクロ」と「マクロ」の相関の絵図を細心の注意と強靱な建築の意志をもって精密に「図柄」化する名匠なのである。そのための現実構成のユニットが、既述のとおり「しかし、それは章単位」(ドストエフスキー「ノート」)である。

ドストエフスキーの『未成年』を「わたくし語り」の物語として把握し、「伝達」・「表現」・「叙述」の言説カテゴリーの組み合わせによる五つのタイプの「意味連関」のモザイク模様として、この物語全体の流れを図示したのが表4である。

表4 『未成年』における「発話行為」のモザイク構成

部	章	節	f = 各節の「Aカテゴリー」に属する発話回数 <sup>[上掲]</sup> = 会話参加者数 F = 「Bカテゴリー」に属する発話回数	節の合計						
	1	1.f(0)	2.f(0)	3.f(11) <sup>[2]</sup> F(2)	4.f(0)	5.f(0)	6.f(0)	7.f(0)F(4)	8.f(0)	8
	2	1.f(0)	2.f(2) <sup>[2]</sup>	3.f(53) <sup>[2]</sup> F(3)	4.f(18) <sup>[5]</sup>	4				
	3	1.f(0)F(1)	2.f(21) <sup>[2]</sup> F(7)	3.f(36) <sup>[7]</sup> F(1)	4.f(0)	5.f(24) <sup>[3]</sup>	6.f(20) <sup>[2]</sup>	6		
	4	1.f(41) <sup>[2]</sup> F(1)	2.f(36) <sup>[2]</sup> F(7)	3.f(0)F(3)	4.f(0)	4				
	5	1.f(2) <sup>[1]</sup> F(2)	2.f(0)F(3)	3.f(6)F(6)	4.f(1)F(6)	4				
	6	1.f(34) <sup>[4]</sup> F(2)	2.f(50) <sup>[5]</sup>	3.f(36) <sup>[4]</sup> F(4)	4.f(11) <sup>[1]</sup> F(6)	4				
	7	1.f(24) <sup>[2]</sup>	2.f(23) <sup>[2]</sup>	3.f(19) <sup>[2]</sup>	4.f(0)	4				
	8	1.f(21) <sup>[2]</sup> F(3)	2.f(59) <sup>[4]</sup>	3.f(23) <sup>[3]</sup>	3					
	9	1.f(37) <sup>[5]</sup> F(2)	2.f(50) <sup>[2]</sup> F(8)	3.f(0)F(5)	4.f(2) <sup>[2]</sup>	5.f(3) <sup>[2]</sup> F(56)	5			
	10	1.f(41) <sup>[3]</sup> F(3)	2.f(25) <sup>[3]</sup>	3.f(11) <sup>[2]</sup>	4.f(50) <sup>[2]</sup>	5.f(0)F(1)	5			
	1	1.f(0)F(4)	2.f(35) <sup>[3]</sup> F(18)	3.f(5) <sup>[2]</sup>	4.f(37) <sup>[2]</sup> F(4)	4				
	2	1.f(4) <sup>[2]</sup>	2.f(35) <sup>[3]</sup>	3.f(73) <sup>[5]</sup>	3					
	3	1.f(74) <sup>[2]</sup>	2.f(0)F(2)	3.f(46) <sup>[3]</sup> F(3)	4.f=31 <sup>[2]</sup>	4				
	4	1.f(37) <sup>[2]</sup> F(8)	2.f(56) <sup>[2]</sup> F(6)	2						
	5	1.f(50) <sup>[5]</sup> F(8)	2.f(53) <sup>[2]</sup> F(5)	3.f(37) <sup>[2]</sup> F(8)	3					
	6	1.f(3) <sup>[2]</sup> F(6)	2.f(0)F(3)	3.f(35) <sup>[5]</sup>	4.f(28) <sup>[2]</sup> F(3)	4				
	7	1.f(30) <sup>[2]</sup> F(3)	2.f(28) <sup>[2]</sup> F(2)	3.f(30) <sup>[2]</sup> F(4)	3					
	8	1.f(32) <sup>[4]</sup> F(2)	2.f(21) <sup>[3]</sup>	3.f(11) <sup>[2]</sup>	4.f(30) <sup>[4]</sup>	5.f(14) <sup>[3]</sup> F(2)	6.f(14) <sup>[2]</sup>	6		
	9	1.f(0)F(16)	2.f(18) <sup>[5]</sup> F(13)	3.f(18) <sup>[3]</sup>	4.f(0)	4				
	1	1.f(0)F(3)	2.f(0)F(2)	3.f(29) <sup>[3]</sup> F(9)	3					
	2	1.f(0)	2.f(35) <sup>[2]</sup> F(6)	3.f(38) <sup>[6]</sup> F(11)	4.f(19) <sup>[7]</sup>	5.f(4) <sup>[5]</sup> F(5)	5			
	3	1.f(0)	2.f(7) <sup>[2]</sup> F(6)	3.f(0)	4.f(38) <sup>[1]</sup> F(27)	4				
	4	1.f(0)F(4)	2.f(24) <sup>[5]</sup> F(4)	3.f(38) <sup>[2]</sup>	4.f(7) <sup>[2]</sup> F(6)	4				
	5	1.f(30) <sup>[2]</sup> F(3)	2.f(63) <sup>[5]</sup> F(2)	3.f(52) <sup>[5]</sup> F(2)	3					
	6	1.f(69) <sup>[2]</sup>	2.f(10) <sup>[3]</sup> F(10)	3.f(35) <sup>[2]</sup>	3					
	7	1.f(19) <sup>[2]</sup> F(2)	2.f=17 <sup>[2]</sup>	3.f(16) <sup>[2]</sup> F(2)	3					
	8	1.f(5) <sup>[2]</sup> F(2)	2.f(11) <sup>[2]</sup> F(6)	2						
	9	1.f(0)F(2)	2.f(55) <sup>[6]</sup> F(7)	3.f(15) <sup>[3]</sup> F(6)	4.f(7) <sup>[2]</sup> F(1)	5.f(12) <sup>[3]</sup>	5			
	10	1.f(0)F(1)	2.f(24) <sup>[6]</sup> F(3)	3.f(35) <sup>[3]</sup>	4.f(60) <sup>[2]</sup>	4				
	11	1.f(17) <sup>[3]</sup>	2.f(34) <sup>[5]</sup>	3.f(18) <sup>[2]</sup>	4.f(36) <sup>[3]</sup> F(3)	4				
	12	1.f(36) <sup>[2]</sup> F(1)	2.f(12) <sup>[5]</sup> F(1)	3.f(29) <sup>[3]</sup> F(1)	4.f(0)F(2)	5.f(10) <sup>[4]</sup>	5			
	13	1.f(0)	2.f(0)	3.f(1*)	「書簡」	3				
3	32	なお節128の「カテゴリー」別の合計は表の下に示したとおりである								128

-  f(0)F(0)・・・Cカテゴリーのみの節 17 (13% : [n/128]×100)
-  f(n)F(0)・・・Aカテゴリーの節 39 (31%)
-  f(0)F(n)・・・Bカテゴリーの節 14 (10%)
-  f(n)F(m)・・・どちらかといえばAが優位の節51 (40%) (ただし n, m)
-  f(m)F(n)・・・どちらかといえばBが優位の節 7 (6%)

## いまここを「越える」

「意味連関のモザイク模様」として『未成年』の全体のプロットを特徴づけるには、これらの「意味連関」の構造について若干の補足説明が必要であろう。

## (1) 類型化される意味世界

「わたしの所見」(mM)として範疇化されるCカテゴリーは「残余カテゴリー」、「雑カテゴリー」であると先に述べたが、このカテゴリーには「いま、ここ」のまなざしを「越える」重要な意味付与作用がみとめられる。わたくしの「まなざしの転換」によって「生き生きした現実」が「<sup>テレビジョン</sup>類型化された現実」へと変<sup>モディフィケーション</sup>様する。客観的な「意味連関」の構築である。いくつか例をあげよう。

わたくしは中学校を終えて、もう二十一歳になろうとしている。わたくしの戸籍上の父はマカール・イワーノヴィッチ・ドルゴルーキー、もとヴェルシーロフ家の家僕をしていた男である。わたくしの実の父はヴェルシーロフである。ヴェルシーロフは地主であったが、生涯に三つの世襲領地、全財産をつぶし、いまは文なしである。二十五歳のとき彼（ヴェルシーロフ）は上流階級出の女性と結婚したが、二十二年まえ二人の子ども、息子のアンドレイ・アンドレーエヴィチと娘のアンナ・アンドレーエヴナを残して他界した。そのころヴェルシーロフは家僕のマカール・ドルゴルーキー（当時五十歳）の若妻ソフィア・バアーヴロヴナ（当時一八歳）と同棲しはじめ、マカールから彼女を買い受け、外国などへ連れ歩く。買い受け後一年してわたくしが生まれ、さらにその一年後に妹のリザベータが生まれる。わたくしは二十歳になるまで、自分の母の顔すらみないも同然だった。ヴェルシーロフはわたくしを含めて自分の子どもたちの養育を全部親戚や知人に委ねていたからである。わたくしは長い間自分の父や母についてな

にも知らず、法律上の父は巡礼となり、三年に一度ぐらいひょっこり姿を現した。（『未成年』

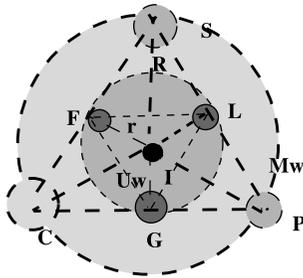
13）

ここに引用した叙述では「わたくし」の社会的な直接世界<sup>ウムヴェルト</sup>、つまり自 - 他の現下における「あらわれ」は主題にならない。「年齢」や「学歴」の担い手としての「わたくし」父や母との「間柄」としての「わたくし」などがここでの主題である。「戸籍上の父」、「実の父」、「母」、「妹」として「あらわれる」他者もまた同じである。現下においてあらわれる徴候充実の他者、すなわち「汝」、ドイツ語の < Du > ではない。汝のあらわれには縮減されない他者、「あのひとたち」、ドイツ語でいう < Ihr > へとわたくしの叙述の関心は向いている。いまここを<sup>トランセン</sup>超越する関心である。

この場合いわゆる「三幅対」圏での徴候充実した身体（L）としてのわたくしや徴候充実した他者（F）を「わたくし語り」は参照しない。いまこの「直接世界」における生き生きとした全身像としてのわたくしではなく、年齢、学歴、間柄としてのわたくし、つまり「類型化された客観的意味連関」としてのわたくし、<sup>ソシヤル・パーソン</sup>社会的人格（P）である。戸籍上の父、巡礼、ヴェルシーロフ家の家僕、当時五十歳であるマカール・イワーノヴィッチの場合も、実の父、地主であるヴェルシーロフ・アンドレーヴィッチの場合も、同じように「典型的に意味構成された」他者である。徴候充実の汝ではない。「あたかも・・・のようなパーソン」としての他者、「人格の理念型」としての「社会的他者」（S）である。

生き生きした全身的なわたくしと汝の<sup>ヴィル・ベツイーウンク</sup>「われわれ関係」（F - L）にかわって、ここでは<sup>イール・ベツイーウンク</sup>「間柄」、役割連関にある「彼ら関係」（S - P）として自 - 他関係は不変<sup>イール</sup>措定される。

「役割」という他者から期待される行動様式を担う「Person」（ガースとミルズ）、「<sup>ホモ・ソシオロジカス</sup>社会学人」



S : 社会的地位 [ 類型化される他者 : 実父・地主・家僕・教師等の地位 ]

Uw : 社会的直接世界 [ 徴候充実の世界、われと汝 ]

Mw : 社会的共時世界/以前の世界/以後の世界

[ 類型化される制度的時空間 : 九月十九日・ペテルブル等 ]

P : パーソン [ 類型化されるわたし : 中学卒・21歳・兄・息子等 ]

C : 社会的通念 [ 類型化される思想や行動等の文化 ]

図3 「わたくし」と「他者」の現れの変様

(ダーレンドルフ), 「<sup>タイプス</sup>類型として考えられた行為者」(ヴェーバー)などの「<sup>ソシヤル・スペース</sup>社会的空間」概念, 「地位 - 役割」概念の源泉はこの不変措置にある。

もしこの「典型的な」あらわれとしての「人格の理念型」(PやS)を先の「三幅対」にかかわらせて図示するならば, 回転軸(I)から半径rの円軌道上に成り立つ「直接世界」の外部に抽象される, 半径Rの「大きな円軌道」(図3)上に位置づけられよう。徴候充実の「自 - 他のあらわれ」(LとF)も類型化した「自 - 他のあらわれ」(P - S)も「わたくし語り」の基本体験である「<sup>デュレ</sup>生の過程」(I)へと統合されるはずだから。

## (2) 類型化される時間

その話(言説)は「いつ」のことが。「叙述」的言説(Cカテゴリー)を以上のようにいまこの直接世界を「越越」する言説として特徴づけるなら, 当然「それはいつのいまか」という「時間の客観化」の問題は避けがたい。

<わたしはこの記録を去年の九月十九日から書き始めることにする>(『未成年』 1 2)

<一月まえ, つまり九月十九日に一月まえのことだが・・・>(同上: 1 7)

<この十九日は, わたしがペテルブルグで, 『個人』の秘書のポストに勤務してからちょうど一月目で, はじめて俸給をもらう日でもあった>(同上: 2 1)

<この十九日にわたしはもう一つの『一步』を踏みだした>(同上: 3 2)

<わたしはこの日エフィム・ズヴェレフにあることになっていた>(同上: 3 3)

<わたしは激しい空腹を観じた。もう夕ぐれになっていた>(同上: 4 3)

<翌朝わたしは努めてはやく起きた。>(同上: 8 1)

<ワーシンの住居に, わたしはほぼ十二時に着いた>(同上; 8 2)

<何か食べるためにある安食堂に入ったときは, もうほとんど暗くなっていた>(同上; 8 3)

<わたしは・・・やがてすっかり眠りにおちた。夜の十二時をまわっていた>(同上; 9 3)

<ちょうど二時間ほどたったころ・・・>(同上; 9 4)

<翌朝十時半ごろ目を覚ました>(同上; 10 1) - ただし引用文中の傍点は筆者 -

以上の言説は『未成年』第一部から抽出した「時間」についての叙述である。時計の時刻, カレンダーの年月日, さらに朝や夕方などの自然の変化は, わたくしの個体的な内的時間意識や「われ - 汝」関係の間主観的時間意識(われわれ意識)から区別される, だれでもの制度化された市民的, 客観的時間である。「いつ」を

問うことは、わたくしの類のない親密な質的「内的時間意識」や「われ-汝」関係の間主観的時間を越えた「類型化され」、制度化された「市民的時間」への超越である。たぐいまれな時間を「標準時間」へと縮減し、自他を結びつける「制度化された社会的時間」へ移行することである。逆に時計の時刻をゆるめ、離脱することは「親密な時間」へ反転することである。

この時間の「内向」の途と「超越」の途との相互転換の問題 直接世界における親密な時間客観（「表現」カテゴリーおよび「伝達」カテゴリーによる言説世界）と客観的制度的な時間客観（「叙述」カテゴリーによる言説世界）との結合と分離 への焦点づけがいかに細心に工夫されていることが。これはすでに図示した『未成年』のユニットとしての「章」のモザイク模様からも明らかであろう。

「生の過程」としてのわたくし（I）を中心として回転する半径Rと半径rの二つの大小の円が描きあげる意味構成。直接世界圏から共時世界・以前の世界・以後の世界圏へのわたくしの「まなざし」の転換、またはその逆。ドストエフスキーが「ノート」に書き残したあの「一人称か作家の立場か」をめぐる方法の選択問題も、ここまでくれば問題の本質がみえてくる。

一人称か、あるいは作家の立場からか。未成年が語る物語のほう配列がより独創的なものになる。あるディテールから他のディテールへと跳び移ってゆく。この配列のなかに彼自身の性格が現れる。しかし、それは章単位とする。一人称のほう独創性があり、愛がある。芸術性をもっと要求される。（傍点は筆者）

『未成年』の第一部は客観的・社会的・市民的時間としてはわずか九月十九日から三日間の出来事の叙述にすぎない。第二部および第三部も同様に正味三日間の出来事である<sup>1)</sup>。にもかかわらず、いうところの「盤根錯節」のカオス

の世界の現出である。カオスの世界ともみえる（「盤根錯節」の）意味連関の現出は「わたくしパースペクティブのまなざし」の「いま、ここ」の徴候充実的な直接世界への自在な立ち返り、「あるディテールから他のディテールへの飛び移り」（ドストエフスキー）、「現実のアクセント」（シュッツ）の移動に由来する。「叙述」の言説空間が「伝達」や「表現」の言説空間をも包み込み、三つの種類の言説空間ともえの三つ巴によって複雑な「盤根錯節」の意味の世界が構築される。「いまここからの超越」のベクトルと「いまここへの内在」のベクトルとの言説空間のダイナミックな相互反転のゲシュタルト。

## V いまここへの「内向」

### V 1 「社交」のソシオメトリー

その話（言説）は誰のことが。わたくしの家族、わたしの知人、わたしの友人。Aカテゴリー（「伝達」）が支配する言説空間（および）は、既述のとおり、「わたくし」の直接世界である。直接世界の社会的局面はわたくし（L）と汝としての他者（F）との「社交」つきあいにあり、家族・知人・友人がその社交の重要な他者つきあい シグニフィカント・アザーとしての汝である。社交をドストエフスキーはわれと汝の「会話のセリー」として言説化する。一人称の「わたくし」がキー・パーソンとしてつねに登場する「会話のセリー」として。「会話のセリー」には「わたくし」とだれか一人の汝との問答という単純なケースもあれば、複数の汝との問答という複合ケースもある。「わたくし」がまったくの観察者にとどまる事例もあれば、会話の中心人物になるケースもある。

表4にみるように『未成年』の多くの「節」が小状況下での「会話のセリー」の細目描写である。幾つかのケースを以下に示そう。図4はもっとも単純な「会話のセリー」である。わた

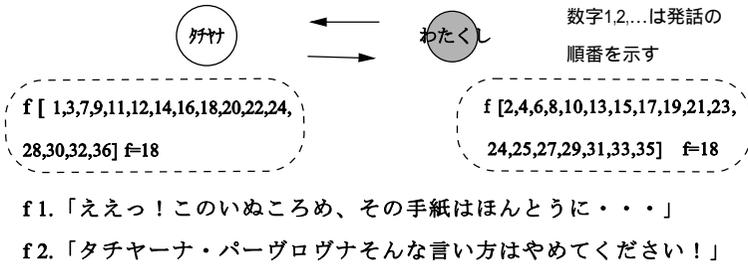


図4 『未成年』 12 1 「爆発」の会話

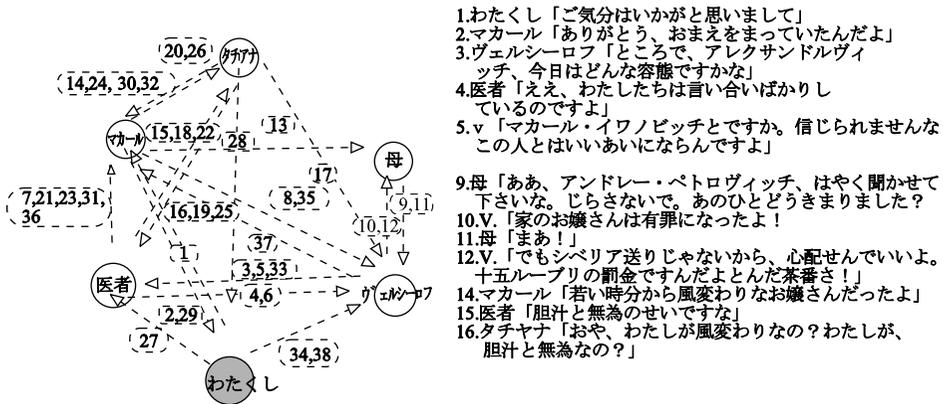


図5 『未成年』 2 3 「病室小景」

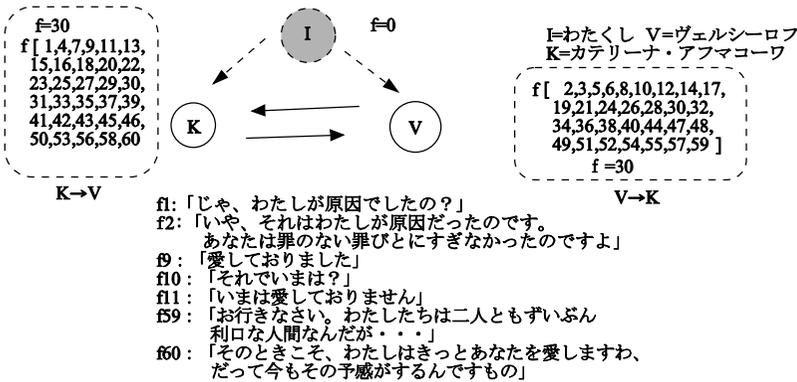


図6 『未成年』 10 4 「鎖は切られた」

くし(L)と重要な他者(F), タチアナ叔母とが「交互に話す」ことによって当該の状況が自由に個人的に比類なく定義づけられる。図5の「会話のセリー」は六人の発話という複合の形式をとるケースである。図6は「二人の会話を盗み聞きする状況に陥るわたくし」のケース

である。

このほかにも異なる形式の「会話のセリー」が次々に繰り広げられが、割愛しよう。全体の八割弱の「節」が大なり小なり「会話のセリー」によって構築されているのだ。実父ヴェルシーロフ, 母ソフィア, 法律上の父マカール, 実妹

リーザ、タチヤナ叔母、ソコリスキー老公爵、カテリナ・アフマーコワ元將軍夫人、その他大勢。これらの人物たち（S）は「人生の舞台にのりだした当時のわたし」が直接世界において出会った「重要な他者」（F）たちである。

「わたし語り」（主観的意味連関）の膨大な言説世界へと九日間の客観的出来事の意味世界（因果連関）は生まれ変わる。類型化される社会的世界の位相（「いまここ」を越えた「共時」・「以前」・「以後」の社会的世界）と社交という「いまここ」の親密な自他関係（F L）の対話的世界（社会的直接世界）の位相そして「孤独なわたくし」の世界（G L）の位相がわたくしのまなざしをとおして重なりあい、異なる位相の相互反転が繰り返されるためである。これは映画のロングショットの画面とクローズアップの画面とがオーバーラップする場面の構成に似ている。客観的典型的な社会的ネットワークにある「彼ら関係」（直接世界からの超越としてのロングショット）と「われと汝」の社交、徴候充実した間主観的な「われわれ関係」（直接世界への内向としてのクローズアップ）とのオーバーラップである。ロングショットに点景として映し出される無声の殺風景な一つの部屋の光景が突然に関連な「『声たち』の「ポリフォニー」（ミハエル・バフチン）の意味連関の世界へと変様する。例の「盤根錯節」の評も「社交」の社会学的・現象学的含意の検討を經由せねばなるまい。

「会話のセリー」の意味世界が現出するや、共時的世界や以前の世界や以後の世界は忽然と溶暗し去る。「いまとここ」がクローズアップされるや市民的時空間の客観性は地平化する。「いまここ」への内向は「いまここ」を越えるあらゆる客観性の断念、即ち、典型的なもの、匿名のもの、社会的なるもののエポケーに他ならない。この表裏一体的連関 図3における「わたくし」と「他者」の現れの変様に着眼す

ること、主観的・間主観的な親密な「時間意識」のゾーンと客観的市民的な「時空間」のゾーンとのみえない意味的境界を自在に越境する「わたくし語り」の特異な「方法上の工夫」。

## 2 不協和のポリフォニー

わたくし語りの『未成年』は、結構（意味構成）の面からみれば、このように「全体がまるごと対話的（ミハイル・バフチン）な意味の小宇宙である。対話は図2にみる「他者への働きかけ」（F L）として定義づけた、Aカテゴリーの「伝達」的言説の別表現である。対話は淡泊な単声の独白の「わたくし語り」を言霊のさきわう小宇宙へ転軸する発話装置であるに違いない。対話を自在にくり広げうる「わたくし語り」は、一次元的な説話 民話や古典的自叙伝にみられる 単純形式を切り崩し、言説の複合的形式を一挙に切り開く。多元的な言説の世界が始動しだすのである。

「対話的な世界」は異なる声の豊かに交響する「意味の小宇宙」（A・シュッツ）ではあるが、耳によいハーモニーの世界ばかりではない。対話による相互「伝達」的言説、Aカテゴリー（Fw）は一面において相互に調和しあい、親和しあい、協和する対称の「会話のセリー」を生むこともできるが、反対に調和せず、緊張をはらみ、対立しあい、離反する「不協和」型の非対称の「会話のセリー」をも生む。協和タイプ（シンメトリー）の「会話のセリー」と不協和タイプ（アシンメトリー）の「会話のセリー」。

異なる声が協和化され、わたくしと汝の「二重の偶然性」（N・ルーマン）が縮減（合意）されること、そのかぎりではいまこの社交は「会話のセリー」によって豊かにされ、われと汝の間の信頼の絆も強められる。反対にいまこの社交が自他の相互理解に失敗し、二重の偶然性の拡散（間柄のきしみ）を加速するばあい、「会話のセリー」（F L）は「分散の不協和音」

と化して、その耳にのこるエコー効果がわたくしの「孤独的声」(「表現」的言説)をうみだす。「伝達」的言説の挫折としてのBカテゴリー(Fe)の発生。

図5の例(『未成年』 23)はコンソナンス(調和と融合)タイプの「会話のセリー」である。『未成年』における「美しい会話のセリー」の一つである。図4(『未成年』 121)や図5(『未成年』 104)はデソナンス(不調和と離反)タイプの「会話のセリー」である。

知人とわたしの会話も 「ドルゴルキー公爵かね?」「いいえ、ただのドルゴルキー」「いや、ただのドルゴルキー、もとの主人ヴェルシーロフさまの私生児です」(『未成年』 13) わたしに対する母の「遠慮」も 「お母さん、ぼくをおまえと呼びずてにしてくれたら、ぼくもどれほどうれいでしょう」「わたしは・・・わたしだっていつもそう・・・いいわ、今日から忘れずにそうすることにしましょう」(同上; 61)も、わたしと父のあいだの「心理的緊張」も、「わからんですな。どうしてこのごろの青年はそりいもそろってみなヒポコンデリー患者なのでしょう」「ぼくがどこで育ったか知らないあなたですもの。そんなあなたに、人間がなぜヒポコンデリー患者になるかなんて、どうしてわかるはずがあります?」(同上, 62)も、わたしの父と母の間の「無言」 「わしはこの二十年間を、きみのお母さんとともに、完全に無言で暮らしてきた。一度も口論すらしなかったように思う。」も、わたしと異母兄弟との間の「社会的距離」も、デソナンスの「会話のセリー」のヴァリエーションである。

「いまここ」に響くこの種の「声」は、とげとげしく、緊張を孕み、絶叫や怒りや失意や悲嘆や陰謀や軽蔑などの「不信」の声たちである。家族同士の「会話のセリー」にも友人や知人の「会話のセリー」にもこの種のデソナンスの多<sup>ポリフォニー</sup>声<sup>フェルゲゼルシヤフテン</sup>が響く。新しい集列化する社会の到来と

農民の共同態的集いの解体のただなかで。

### 3 社交からの撤退

ア<一つだけよくないことがあった。ある重苦しい考えが昨夜からわたしの内部にうごめいて、頭から離れなかった。・・・『なかに、ぼくがなにも言わなくなつて、もう熱しきって煮えたぎっていたのだ』わたしはときどきこうくりかえした。『なに、なんでもないさ、いまにすぎしてしまうだろう!そしたらぼくはもとどおり元気になれるさ!なにかで埋め合わせをしよう・・・』> (『未成年』 105)  
イ<わたしの理想、それはロスチャイルドになることである> (上掲書 51)  
ウ<ここで『なんのために』と『どういう理由で』さらに『道徳的かどうか』等々の問いにたいして答えるときがきたようだ。わたしの理想の目的のなかには復讐の気持ちは全くない。パイロンのなもの 呪いも孤児のなげきも私生児の涙も、そうしたものはいっさいないのである。・・・わたしの理想の目的のすべては『孤独』になることである> (上掲書 53)

#### (1)「パイロンの怨嗟の声」

デソナンスの「会話のセリー」が雪だるまとなれば、オルタナティブは「社交」からの撤退である。アは道徳的呵責が「社交」以後に随伴する事例である。<もしかしたら「対話のセリー」のデソナンスが不幸な娘オーリヤの自殺の原因だったかもしれない、と>。わたしの関心は突然にオーリヤとの過ぎ去った「会話のセリー」の想起へと転ずるのであり、いまこの「伝達」的関心は萎え凋み、過去からの沢山の「声」たちがわたしの身のまわりにこだまする。「呪い、孤児の嘆き、憤怒、復讐、憂愁」の「声」たち、「パイロンのなもの」(『未成年』 53)の意味世界である。過去が「いまここ」へ還流する瞬間であり、いまこの社交的間主観的時間(F L)の各自的孤独的時( F

G)への転換である。「理由の動機」(A・シュッツ)や「主観的に思念された意味」(M・ヴェーバー)を解明するときである。

わたくしの「対話のセリー」は「道徳的かどうか」の煩悶。「理由の動機」の探求は「道徳的呵責」の感情を刺激する。社交のときの間主観的「対話」(「伝達」のAカテゴリー)からの「孤独なわたくし」の主観的各自的言説(「表現」のBカテゴリー)への転換は、おのずと客観的公的市民的言説(「叙述」のCカテゴリー)へのアクセント移動を併発する。「わたくし語り」における「伝達」、「叙述」および「表現」の各言説は「生への注意」(わたくしの「まなざし」)による同一事象の異なるあらわれ、「ゲシュタルトの転換」なのだから。

## (2)「ルソー的理想の声」

「いまここ」から離反し、「いまここ」での社交を遮断する、もう一つの「各自的孤独な言説」がある。イの「わたくしの理想」である。「社交」に挫折するまえに社交を退く態度である。「わたしの『理想』はロスチャイルドになることである。」「われ荒野に去らん」と「自己の理想」のために世間を去る態度である。「理想」はときおり『告白』のルソー的奇行をまねる『チュル、リュル、リユー』(『未成年』105)の若者をうむ。「なにか頭のなかに常時動かない強いものをもって、それにすっかり熱中していると、そのためにさながら世を避けて荒野へ隠れたような具合になり、まわりに起こる一切のことが理想にはじき返されてすべり抜けてしまう」(『未成年』54)。「いまここ」のリアリテイに赴くまえに、ユートピアの虚の空間にこだまする声に魅了される。「理想はものをみる目を迷わせ、現実から遊離させるおそれがある。」「いまここ」のトポスからのドロップ・アウト。隠遁と自閉の地平を開く「表現」的言説。「理想」は本来的にユートピア(「いまこの存在と一致しない態度」 K・マンハイム)であり、い

まこの社交からの「超脱」としての未来への主観的定定である。

不協和の「会話のセリー」の社交からドストエフスキーは、離脱の二つのオルタナティブを識別する。すでに存在した過去の「会話のセリー」から聞こえる「パイロンの怨嗟の声」といまだ存在しない未来の虚空から幻聴される「ルソー的理想の声」。 「いまここ」の相互「伝達」が思いどおりに進行し、対話的言説の弁証法的「全体化」作用を亢進させて「過去の記憶」や「未来の予期」をたえず自らにおいて修復実現する限り、「なんの目的のために」や「どのような理由で」という問いの反芻はあり得まい。

しかし相互「伝達」の集積が自-他関係の「全体化作用」を自壊させ、わたくしの生が「過去の怨嗟」の滞留と「ユートピア」の夢想をもっぱら虚的に増殖する場合には、「対話」的言説の弁証法は自己否定的に「表現」的言説のさまざまな「各自的孤独な意味」の果実を産出することになるだろう。

ドストエフスキーの『未成年』はとりわけこの「各自的孤独的な言説世界」カテゴリーの創出という一つの作為において優れて「現代的」である。現代の「いまここ」の社交が「人倫的地縁的血縁の小宇宙」に局限されず、「共時的世界」の制度的外皮つまり「商品市場関係の集列態」によって被覆されるかぎり、「各自的孤独的な言説」の流出と分散は例外であるよりも、むしろ常態であるといえるから。

『未成年』の「盤根錯節」問題は、繰り返せば、ドストエフスキーの語り口における三つの異質的な言説の「併存」という事実を直視させる。一つにはわたくしにおける各自的孤独的意識体験の言説化としての「表現」的意味地平の定立、二つにはわたくしにおける間主観的「われわれ」的意識体験の言説化としての「伝達」的言説の意味地平の定立、三つには両地平

をとりかこむわたくしにおける市民的「彼らの」意識体験の言説化としての「叙述」的言説の意味地平の定立、この三つの意味地平の相互浸透とゲシュタルト転換によって構築されるわたくし語りによる「意味連関」のモザイク構成。「各自的孤立的」、「間主観的われ-汝的」および「市民的、彼らの」というわたくしにおける言説の複合系の共存の自覚。この自覚なしには、たった九日間の出来事の「客観的意味連関」が「わたくし語り」の大部の物語に「盤根錯節」化することは不可能であった。

### 小括と展望

最後に、以上に述べたことを要約し、「わたくし語り」の射程と限界および意義について触れる。

#### (1) なんでも入らずだ袋

『未成年』の完成後ドストエフスキーがただちに着手した作品は『作家の日記 *Dnevnik pisatel'ia 1873-81*』（小沼文彦訳『作家の日記』全六巻：ちくま学芸文庫）である。「編者、出版責任者兼単独執筆者」というドストエフスキーの「ワンパーソン出版物」としての『作家の日記』である。この『作家の日記』もドストエフスキー研究家のあいだには「読みにくい作品であるという定評がある」（川端香男里・『作家の日記 6』253頁参照）。英語版によせた「予備的研究」においてモーソン（Gary Saul Morson）はロシアの「スラブ的伝統」を「融通無碍の怪物」（loose baggy monsters）であると特徴づけ、ドストエフスキーの『作家の日記』こそその「最大の融通無碍の怪物」とであると記している（A Writer's Diary (1994) - tr., Kenneth Lantz p.1）。「雑多なジャンルの文学が結びあわさって」、「一つにまとめあげられた文学作品」の「月刊雑誌」。「わたくし語り」の袋口からなんでも勝手に詰め込まれる「ずだぶくろ」。まさに「盤根錯節」

の語り口の極みである。

しかるに「雑多なジャンルの文学」が大きなくずだ袋にいっぱい「詰まっている」ということが『作家の日記』の真の係争点であろうか。むしろ誰がどのようにずだ袋に詰めたのか、どんな目的でか。『未成年』の「盤根錯節」の場合と同様、この点がここでも問題になる。詰められた中身が多いか少ないか、ありふれたものか珍しいものか、これも二次的な問題である。「わたくし」をたえず照会する物語の構造、つまり「自己言及の物語」とはいかなる言説の構造であるかという問題に比すれば。問題の核心は結局ドストエフスキー「『未成年』ノート」（本稿の「3方法の確定」を参照）の「わたくし語り」について理解することである。

#### (2) 「歴史小説」から「現在の記録」へ

「ドストエフスキーはわかりにくい」と評する読み手と書き手のドストエフスキーのあいだにはある微妙なそして重大な関心の違いがみられる。

くわたしは自分を抑えきれなくなつて、人生の舞台にのりだした当時のこの記録を書くことにした。・・・それはわたくしの内的要求の結果なのである。それほどわたしはそれらの出来事にはげしく胸をゆさぶられたのである。>（11）

「・・・あなたの手記にもどりましょう。・・・さて、アルカージイ・マカーロヴィチ、ここでわたしはあなたにいつてもらいたいのです。この家庭は、偶然の家族であると。そしたらわたくしのところはどれほど救われることか。ところがその反対です。すでに多くのこのような、まぎれもない名門のロシアの家庭が、抗しきれぬ流れに押されてぞくぞくと偶然の家族に転化し、ともどもに全般的な無秩序と混沌の中に巻き込まれていく、という結論のほうがむしろ正しいのではないのでしょうか。そうです、アルカージイ・マカーロヴィチ、あなたは 偶然の

家族の一員なのです。・・・しかもそれらのタイプは、未だ流動していて、従って芸術的に完成されたものではありません。重大な誤謬もあり得ますし、誇張や見落としも考えられます。いずれにしても、推量で補わなければならぬことはあまりにも多すぎます。といって、歴史小説のみを書くことを望まず、現実に対する思慕にとらわれている作家は、一体どうしたらいいのでしょうか・・・」( 13 3 )

これは『未成年』冒頭の「書き出し」と物語の「結び」のアルカジーにあてた「手紙」の一章 明らかにドストエフスキー自身の見解である。物語の主人公「わたし」の語り口および作家ドストエフスキー「わたくし」の語り口という二重の「自己言及」的言説をとおして、この小説の着想が生き生きと語られている。過ぎ去った既往のことがらについての関心から、いま、このまだ流動的であり、現在進行していることがらについての関心へ。定形の過去の記録よりも無定形の現在の記録への関心。『歴史小説』から『現代物語』へ。一つの視点の転換、一種の物語論のパラダイム転換である。

この書き手の側の断固たる決意にたいして、世のひとはえらく無頓着である。その決意のほどを誰も吟味などしない。両者の関心のズレ。『未成年』はしかし決して無原則的で折衷的な「融通無碍のずだ袋」ではない。凝固した歴史から流動する現在への視点転換。これは社会学のパラダイム転換にとっても示唆的である。

### (3) 「内世界的間主観性」の範疇

いまこの流動する現在の出来事へのたえざる関心は社交の「会話のセリ」、伝達ツク的言説ウムヴェルト(語)の直接世界を豊饒化し、ズームアップする。一面、過去の「記憶」(「以前の世界」)や未来の「理想」(「以後の世界」)にかかわる「各自的孤独的」表現の意味世界や社会の動きにかかわる「類型的客観的」叙述の意味世界

(「共時世界」)は背後の地平へと追いやられるが、他面、対照によってこれらの世界は差異化され、それぞれの意味領域の独自性が明瞭になる。「わたくし」のまなざしに映ずる生々しい対話的コミュニケーションの世界の現前化。「対話的コミュニケーションの世界」(いまこの「社交」)を中心に異なる意味領域の諸現実 共時的世界、以前の世界や以後の世界 が一つの意味的秩序、『未成年』へと編成される。

ドストエフスキーによる「流動する現在」の主題化は内世界的な間主観性インターサブジェクティヴィティの概念を「存在論的基礎範疇の一つ」として重視する一つの学的態度、「自然的態度の現象学」(A・シュッツ)のアプローチに通ずるものがある。類型的客観的言説世界(「叙述」カテゴリーによる)や各自的孤独的主観的言説世界(「表現」カテゴリーによる)の発生論的理解、これらの言説世界の始元的土台としての間主観性への「帰還」。物象化した意味的世界の人格的契機(パーソン)と構造的契機(制度)を人間の実践の土台、間主観性の世界、われわれ関係へと連れ戻すところみである。もちろんその逆の歩みをも射程に入れながら。

間主観性は人間存在の、またしたがってあらゆる哲学的人間学の、存在論的根本範疇である。人間が母親から生まれるかぎり、間主観性とわれわれ関係は人間存在の他のあらゆる範疇の基礎である。自己反省の可能性、わたくしの発見、あらゆるエポケーの遂行能力、さらにあらゆる伝達の可能性やコミュニケーション環境ウムヴェルトの構築もまた、われわれ関係の原経ウアルファールクに基礎づけられている。(A Schütz Collected Papers III., p.82)

間主観性とわれわれ関係、いわゆる面体面の関係の諸展開が一方では「わたしの発見」や「自己反省の可能性」「コミュニケーションの可能性」をうみ、他方ではこの関係の原的体験の蓄積が人間存在のあらゆる

範疇 社会的文化的「構造」,生活世界の存在論 土台となる。間主観性と「われわれ関係」は「アイデンティティと社会」の全運動の基礎,問われざる地盤である。

ドストエフスキーの『未成年』は、「会話のセリー」の諸展開によって間主観性とわれわれ関係がいかに「偶然の家族」の「彼ら関係」の意味世界 類型的客観的な自他関係[私生児,実の父,地主,家僕,法律上の父など]と相関し,また同時に「地下室の人間」のような「わたくしの発見」 孤立的各自的な「他者態度」の意味世界 を可能にするかを描ききった[『わたし』と『他者』のあらわれの変様]図3を参照]。それは「自然的態度の現象学」の方法意識によるまったく新しいタイプの「わたくし語り」の小説であるといっても過言ではない。

#### (4) ある歴史的展望のなかで

『未成年』全体の主題はわたくしにおける「いまここ」の「社会的」時間意識と「各自的孤立的」時間意識との間の不協和と緊張の再生産の問題である。この問題から「アイデンティティと社会」問題についての一つの歴史的展望が得られる。

『未成年』の物語は「歴史的共同体」の「運命」(「むら共同体」の神聖な伝統と慣習)に指向する没個体的・没主観的な集合体的記憶の物語(民話)の地平を飛び越えている。集合体的記憶は「口承」による伝達の言説スタイルをとり、「私的孤立的」時間意識の言説化がゼロ度の知である。「われわれ関係」の親密性の境界はもっぱら「彼ら関係」の類型性によって識別され,構造が(行為にたいして)優位する物語の世界(「赤ずきん」)である。これに対して『未成年』はペテルブルグという遙かに現代的・都会的・流動的都市空間での「社交」の可変性,わたくしの重要な他者との偶然な頻発する不協和で多様な触れ合いが「物語」の中心

に据えられる。それ故「われわれ関係」の親密性の喪失の物語でもある<sup>12)</sup>。

『未成年』は一見すると孤島生活における「ロビンソン物語」の日付と日記の「私」的記憶の物語に類似している。なぜなら『未成年』も,日付と日記の「客観的制度的」時間のフレームを重視し,さらに孤立的各自的時間を紡ぐ「地下室の悲劇の主人公」の「私的記憶」の世界にも関心をむけるのだから。しかし二つの物語には違いが見られる。

『未成年』の時間の構造は,いまこの「直接世界」の「われわれ」関係,つまり社交の「間主観的」時間を主題核にもち「ロビンソン物語」では周辺化する,日付の「客観的」市民的時間および理想や私的記憶の孤立的「主観的」時間がそれを取り囲む外部地平および内部地平となるゲシュタルトの特徴を帯びている。この主題核の社交的時間の成り行きが,場合によっては,自己について過度に「敏感である」地下室の主人公の主観的時間を主題化したり,「日付の客観時間」の参照という外的フレームを主題化する。「内部地平」の自己観察(L G)が主題化するかぎりで『未成年』は「ロビンソン物語」と同様「孤立的主観的」時間という「内部指向的」な時間的特性を帯びるが,「ロビンソン」物語における「自立した私的人格の自由」という物語への明るい展望をもたない。むしろ多数の重要な他者たちとの「社交」の間主観的時間の恩恵に浴しながら「引き裂かれた自己」(R. D. Laing)「外部指向タイプ人間」(D・リースマン)など「過度に社会化された自己」を再生産するようなのである。「盤根錯節」のドストエフスキー『未成年』はそのかぎりでもっとも今日的意義をもつ作品といわねばならない。

#### (5)「未成年」とアイデンティティ

最後に,本稿の「はじめに」で触れた訳語「未成年」に関連して一言つけ加える。人間の

ライフ・サイクルの一時期としての「未成年 young adult」の問題である。エリクソンは『アイデンティティとライフ・サイクル』のなかで人間の心理社会的な発達段階を八つの時期に区別する。すなわち (1)「信頼と不信」(Trust vs. Mistrust) の幼児期 (2)「自律と恥, 疑い」(Autonomy vs. Shame, Doubt) の初期児童期 (3)「率先と自責」Initiative vs. Guilt の遊戯年齢期 (4)「勤勉と劣等」(Industry vs. Inferiority) の学齢期 (5)「アイデンティティとアイデンティティ拡散」(Identity vs. Identity Diffusion) の青年期, そして (6)「親密と孤立」(Intimacy vs. Isolation) の未成年期 Young Adult (7)「生殖と自己専念」(Generativity vs. Self-Absorption) の成人期, 最後に (8)「統合と嫌気, 絶望」(Integration vs. Disgust, Despair) の熟年期の八つの時期である。

ここでエリクソンのライフ・サイクル論に着目する理由は、もちろん「未成年」期を「青年期」と「成人期」の中間期に独立したカテゴリーとして位置づけているという純学問的重要性の認識にあるが、そればかりでない。エリクソンによれば、未成年のアイデンティティ問題とは一方で親密な関係を異性や同性に求めながら、他方で「他者」からの「孤立」をも求める、いわば「両義的」心性の発達傾向の問題性にあるとする。ドストエフスキーにこれを関連づければ、彼の『未成年』の物語はライフ・サイクル論を間に挟む「アイデンティティ問題」ではなかったのか。ルソーやゲーテの古典的な人格形成の教養小説ではなかったとしても。

青年期と成人期の間が益々長期化しつつある今日の「文化的社会的状況」のもとでは、ドストエフスキー＝エリクソンの「未成年」問題は「社会とアイデンティティ」問題として今後とも一層の掘り下げを要する研究であろう。今日の「アノミー的状況」は「未成年」期のパーソナリティにおける「両義的」心性の分裂化傾向

に拍車をかけかねない。

ドストエフスキーの『未成年』が重要であり面白いのは、両義的心性の分裂化傾向という「未成年」期特有のアイデンティティ問題を、図式的な単純化（例えば主人公の自我心理のダイナミズムと時代のアノミー的社会的状態の、「行為主体と社会構造」の、制度論から行為論までの社会的説明図式のバリエーションに陥ることなく、わたくし語りの「精神・身体・他者」の三幅対の言説構造や「わたしと他者のあわれの諸変様」の図式等の叙述を工夫して、「未成年」の輻輳した現実を意味構成していることにある。『未成年』におけるわたくし語りは「単なる小説構成の技法」というよりも「現実構成」のラジカルな刷新であった。

## 注

- 1) ミハイル・パフチン/望月・鈴木訳『ドストエフスキーの詩学』117頁 筑摩学芸文庫 1995
- 2) 「わたくし語り」、すなわち「一人称の語り」はすでにアウグスチヌス『告白録』にみられ、ゲーテ『詩と真実』、ルソー『告白』などの古典的「教養小説」(Bildungsroman)、さらに時代を下ってヴァージニア・ウルフ、マルセル・ブルースト、ジェームズ・ジョイス等の「意識の流れ」(Stream of Consciousness)文学に連なる。「ぼく」を主人公とする大江健三郎の小説などにも同じ作法がみられる。もっとも手法が「同じ」だからといって、そこで扱われている「主題」は異なる。「一人称で語られる」主題・動機・解釈のレリヴァンスの構造(なにを、いかなる理由と目的で、いかなる脈絡で「一人称の叙述」が用いられるか)を明らかにすることでなければならない。
- 3) このドストエフスキーの認識は、半世紀後マックス・ヴェーバーが下したロシア社会の「非歴史性」という<時代診断>と驚くほど類似している。「今日のロシアにおいて一体<歴史>とは何か? 教会と農民的耕地共同態をのぞけば・・・タタール人時代以来継続しているツァ

ーリの絶対権力 - これは今日、十七世紀、十八世紀のロシアにその決定的刻印を与えた例のすべての<有機的>形成体が粉微塵に砕けてしまった後、全く非歴史的な「自由」のなかで空中遊泳しているが、この権力以外におおよそにも存在しない。百年も前からその<もっとも国民的>諸制度において、デオクレチアヌス王朝に著しい類似を示してきたひとつの国は、実際のところ、「歴史」に定位し、同時にしかも生命力ある、いかなる<改革>をも実行し得ない。(Max Weber, S.33f.)

ヴェーバーの視点からみれば、ドストエフスキーは、ながく停滞したロシアの伝統社会に「資本主義的近代化」がもたらした巨大な衝撃とこれにともなう社会組織の「解体」問題をその主題に取り上げた最初の作家だということになる。

- 4) 『未成年』「創作ノート」には次のような記述がみられる。「重要なこと。あらゆるところに崩壊の思想が現れている。というのも、すべてがばらばらで、ロシアの家庭のなかだけでなく、たんに人間と人間の間ですら、絆がまるでなくなっているのだから、子供たちさえ、ばらばらだ。」(ドストエフスキー「『未成年』創作ノート」邦訳 一七頁)「小説の題名は - 『無秩序』。小説の思想はあげて、いまや全般的な無秩序だ。ありとあらゆる場所、社会の諸事業のなか、指導理念のなか、信念のなか、家族の原理の崩壊のなかに無秩序がはびこっている・・・ということを提唱することにある。もしも熱烈な信念があるとしたら、それは破壊の信念<社会主義>があるだけだ。道徳的理想は存在しない。突然ひとつ残らずなくなってしまった」(『未成年』創作ノート」邦訳 四一頁)。エミール・デュルケムにならって、近代社会の「アノミー」(「道徳的無規制」)現象の研究をもって「社会学」の誕生とみるなら、ドストエフスキーこそロシアにおける「最初の社会学者」であったと言わねばならないであろう。

- 5) この第一の問題については以下に掲げる「研究ノート」を参照してほしい。

『未成年』の時代背景に関する研究ノート

十九世紀後半におけるロシア社会の「大変動」を知る手がかりとなる、いくつかの統計資料がある。一つの資料はロシアにおける「都市と農村の人口動態」に関する統計(表1)、二つ目

はヨーロッパ主要都市の人口比較の統計(表2)、三つ目はヨーロッパ諸国の「鉄道営業キロ数」に関する統計(表3)である。いずれの統計もマクロな社会指標として重要である。

都市と農村の人口移動

表1のヨーロッパ・ロシアの「都市と農村の人口動態」の統計によれば、一八六三年の時点におけるロシア総人口に対する「都市人口」の比率は僅か一割にも満たず(9.94%)、それから三十四年後の都市人口も一割をわずかに越える(12.76%)程度にすぎない。それゆえ「農奴解放令」(一八六一年)前後のヨーロッパ・ロシアの社会構成は「農業・農民・農村」として概括され、都市人口の9.6%から12.76%への微増は「資本主義的近代化」の巨大なうねりからみればまだまだ「平穩」無事のように見える。

しかしこの人口動態を注意深く観察すると、このなかに以下のようないくつかの特異な注目すべき事実があることに気づくであろう。第一に、ペテルブルグやモスクワの首都の県(「第一グループ」)はその他の諸県(「第二のグループ」から「第九のグループ」まで)と比べて「都市人口」の比率が「高く」(38.6%)、三十四年間にその傾向はますます顕著となっている(56.2%)。十九世紀のロシア社会においてこのようにはっきりと非農業的・都会的・非農民的社会空間を形成しているのは、ペテルブルグ県とモスクワ県のみである。第二に、都市部における人口増加率の増大という意味での「都市の急成長」である。上述のペテルブルグやモスクワの「第一グループ」(141%)のみならず、「第五グループ」(バルト海沿岸の諸県)が最高の188%、「第四グループ」(ノヴォロシア、ヴォルガ下流などの諸県)130%、そして「第八グループ」(ウラル)105%である。ロシア全土では平均95.6%の都市部の人口増加率。これに反して農村部は48.5%。都市部が社会変動の牽引車の役割を果たしている。

サンクト・ペテルブルグ

ところでサンクト・ペテルブルグは、モスクワからの遷都(1721)後、十九世紀をととしてロシアの首都であり、農業国ロシアにおける「非農業的・都会的・非農民的」社会空間としてユニークな地位を占めてきた。「ヨーロッパ的近代化」の模範都市 「ヨーロッパに向け

表1 ロシアにおける都市と農村の人口の比較（1861/1897）

groups of gubernias of European Russia (ヨーロッパ・ロシアの 県のグループ)		Populations (thousands)						Urban Population as %		% increase of population between 1863 and 1897		
		1863			1897			1863	1897	Total	Rural	Urban
		Total	In settle-ments	In town	Total	In settle-ments	In town					
1. Metropolitan.....	2	2,738.4	1,680.0	1,058.4	4,541.0	1,989.7	2,551.3	38.6	56.2	65	18	141
2. Industrial and non-agri-cultural.....	9	9,890.7	9,165.6	725.1	12,754.1	11,647.8	1,104.0	7.3	8.6	29	26	52
<i>Metropolitan gubernias, non-agricultural and in-dustril .....</i>	11	12,629.1	10,845.6	1,783.5	17,292.8	13,637.5	3,655.3	14.1	21.1	36	25	105
3. Central agricultural, Malo-rossia and Middle Volga	13	20,491.9	18,792.5	1,699.4	28,251.	25,464.3	2,727.1	8.3	9.8	38	35	63
4. Novorossia, Lower Volga and Eastern	9	9,540.3	8,472.6	1,067.7	18,386.4	15,925.6	2,460.8	11.2	13.3	92	87	130
<i>Total of first four groups</i>	33	42,661.3	38,110.7	4,550.6	63,930.6	55,027.4	8,903.2	10.5	13.9	49	44	95.6
5. Baltic	3	1,812.3	1,602.6	209.7	2,387.0	1,781.6	605.4	11.5	25.3	31	11	188
6. Western	6	5,548.3	4,940.3	608.2	10,126.3	8,931.6	1,194.7	10.9	11.8	82	81	96
7. South- Western	3	5,483.7	4,982.8	500.9	9,605.5	8,693.0	912.5	9.1	9.5	75	74	82
8. Urals	2	4,359.2	4,216.5	142.7	6,086.0	5,794.6	291.4	3.2	4.7	39	37	105
9. Far North	3	1,555.5	1,462.5	93.0	2,080.0	1,960.0	120.0	5.9	5.8	33	34	29
<b>Total</b>	<b>50</b>	<b>61,420.5</b>	<b>55,315.4</b>	<b>6,105.1</b>	<b>94,215.4</b>	<b>82,188.2</b>	<b>12,027.2</b>	<b>9.94</b>	<b>12.76</b>	<b>53.3</b>	<b>48.5</b>	<b>97.0</b>

1. 首都の県： St.Petersburg, Moscow; 2. 工業および非農業の県： Viadimir, Kaluga, Kostroma, Nizhni-Novgorod, Novgorod, Pskov, Smolensk, Tver, Yaroslavl; 3. 中部農業の県，小ロシア，ヴォルガ中流の県： Voronezh, Kazan, Kursk, Orel, Penza, Poltava, Ryazan, Saratov, Simbirsk, Tambov, Tula, Kharkov, Chernigov; 4. ノヴォロシア，ヴォルガ下流，東部の県： Astrahan, Bessarabia, Don, Ekaterinoslav, Orenburg, Samara, Taurida, Kherson, Ufa; 5. バルト海沿岸の県： Kurland, Livonia, Estland, Vitebsk, Grodno, Kovno, Minsk, Mogiev; 6. 西部の県： Vilna, Vitebsk, Grodno, Kovno, Minsk, Mogilev; 7. 西南部の県： Volhnia, Podsk, Kiev; 8. ウラル： Vyatka, Perm; 9. 極北の県： Archangel, Vologda, Olonests

(引用： V. I. Lenin, *The Development of Capitalism in Russia* p.563, in: *Collected Works Vol.3* 1960 Moscow)

て開かれた窓」(プーシキン)であり、ドストエフスキーが『未成年』を執筆した一八七〇年代は「ナロードニキ」の革命運動の中心地でもあった。またサンクト・ペテルブルグはヨーロッパにおける有力都市の一つでもあった。表2が示すように、十九世紀前半期においてロンドンとパリにつぐヨーロッパ第三の都市であり、やがてウィーンやベルリンにその地位を譲るものの、一八九〇年代には百万都市にまで成長している(現在の人口は四七〇万人)。

#### 鉄道網

もう一つ指摘すべき論点がある。ペテルブルグのような巨大な消費都市の形成と発展は、ロシアにおける大量の商品流通の刺激因となり、また商品の大量生産を結果したことである。この「市場経済システム」の発展には、土地に自足する伝統的な農業経済とは異なり、商品流通に必要な「鉄道網」などの基盤の整備が不可欠であった。ロシアの大地を縦横に走る鉄道網や道路網の整備、巨額の資金の調達、大量の労働力、水準の高い技術力等。これをなす政治経済力はどこにあるのだろうか？ 国家による「上からの」改革と推進。表3の「ヨ

ロッパ諸国の鉄道営業キロ数」の記録は、ロシアやヨーロッパ諸国の「近代化」の歩みを示す「市場」形成の指標である。ロシアの鉄道網は1861年：2,238kmから1891年：30,223kmに伸びた。三〇年間で一三倍以上の拡充である。イギリスをはじめ、フランスやドイツと比較すればロシアの鉄道事業がどのような国庫的負担問題を潜在していたかが理解できよう。

ドストエフスキーが『未成年』に着手した一八七〇年代のはじめはロシアにおける鉄道建設事業の最初の高揚期であった。ロシア経済が「激変」したのである。

#### 「ロシアの近代化」素描

以上の数字からロシアの「近代化」の特色がみえてくる。十九世紀のロシアには異なる二つの顔がある。一つの顔は「社会空間」としてのロシアの伝統的な「農村の原風景」であり、もう一つの顔はごく限定された「社会空間」としての「都会的風景」。「上から」人為的に押し進められる「ヨーロッパ」の顔としてロシアである。時代が進むにつれて二つの顔はいつその不釣り合いと亀裂を増す。都市が農村をいよいよ決定的に支配する。このロシアの「二つの面

相)にドストエフスキーは「大変動」と「混沌」を直観したのである。

ドストエフスキーのこの直観を、ほぼ二〇年後レーニンは『ロシアにおける資本主義の発展』のなかで「ロシア経済の分析」として全面的に体系立てた。その「経済の相互連関分析」がロシア社会に占めるペテルブルグの特異な「社会空間」の特徴を明視させる。

「もしロシアを西ヨーロッパの工業諸国と比較するのなら、それらの諸国をこの地域(「第一のグループ」とだけ比較しなければならないだろう。この地域だけが工業的資本主義諸国とほぼ同質の条件のもとにあるからである。」(レーニン『発展』3.151頁 English. p.562 傍点は筆者)。ドストエフスキーはペテルブルグ、すなわち「西ヨーロッパ工業諸国(の「近代化」と)との比較を可能にする「唯一のロシアの社会空間」に照準を合わせることで「ロシアの大変動」を先取するのである。十九世紀ロシア社会が直面したヨーロッパ「近代」との出会いがもたらした<途方もない>衝撃の大きさの自覚なしには、ドストエフスキーの長編小説『未成年』はなかったであろうし、彼の「一人称で語る」小説の構築もなかったのではないか。

- 6) 作田啓一『ドストエフスキーの世界』筑摩書房  
7) この概念については、特にアルフレッド・シュッツ/佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』第4章第33節~第35節:「C 社会的直接世界」

二二四頁~二四二頁を参照せよ。社会学におけるシュッツの現象学的社会学の功績は「主観的に思念された意味」(ヴェーバー)の内的地平への沈降と外的地平への超脱との二正面作戦の展開にあったことに気づく。

- 8) Maurice Merleau-Ponty (1945) *Phénoménologie de la perception* Gallimard., cf., p.81f. p.106, p.114. M・メルロー = ポンティ/竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学』みすず書房、特に「第一部 身体」における「対象としての身体」、「身体の経験」、「自己の身体の空間性および運動性」などを参照すべきである。
- 9) 「他者にたいする働きかけ」、「他者への態度」および「わたしの所見」については注7)の拙訳における「他者影響」「他者定位」「観察者の体験」を参照。なおこの問題を考察した論文として中村文哉「A・シュッツの社会関係論における三者関係の問題について - 現象学的社会関係論の可能性」『社会学史研究』71頁~85頁、いなほ書房1997)がある。
- 10) この「伝達」・「表現」および「叙述」のカテゴリーについてはシュッツ論文「小説の意味構造」(Sinnstruktur der Novelle; Goete [Zur Sinnstruktur literarischer Gattungen] im Alfred Schütz (1981) *Theorie der Lebensformen*, hrsg. von Ilja Srubar S.251-275) から示唆を得た。
- 11) 第二部の「時間」の経過は以下のである。<ここで二ヶ月ほど先へとぶことになるが、十一月十五日という日をここにはっきりと記し

表2 ヨーロッパ主要都市の人口(単位1000人)

都市/西暦年	1750	1800	1850	1860	1870	1880	1890	1900
ロンドン	670	1,117	2,658	3,227	3,890	4,770	5,638	6,586
パリ	576	581	1,053	1,696	1,852	2,269	2,448	2,714
ウィーン	175	247	444	476	834	1,104	1,365	1,674
ベルリン	90	172	419	543	826	1,122	1,579	1,889
St・ペテルブルグ	150	336	485	539	667	877	1,003	1,268
モスクワ	130	250	365	352	612	746	799	989

資料出典: ブライアン・ミッチェル『マクミラン新編世界歴史統計』から作成

表3 ヨーロッパ諸国の鉄道営業キロ数: 単位 km

国/西暦年	1845	1851	1861	1871	1881	1891	1901	1911
ロシア	144	1,004	2,238	13,641	23,091	30,723	56,425	68,028
イギリス	3,931	10,090	15,210	21,558	25,336	27,902	30,386	32,223
ドイツ	3,281	6,143	11,497	21,471	34,381	43,424	52,933	61,976
フランス	1,049	3,248	9,626	16,563	24,249	33,873	38,274	40,635
オランダ	153	175	?	1,488	1,961	2,623	2,819	3,190

資料出典: ブライアン・ミッチェル『マクミラン新編世界歴史統計』から作成

ておこう> (『未成年』 1 1) <この11月15日の朝、わたしはセリョージャ公爵のところで彼に出会った> (同上: 2 1) <もう三時をまわったことが、わたしを不安にした> (同上: 4 1) <食事の時間にわたしは遅れたが、一同はまだ食卓につかないでわたしを待っていた> (同上: 5 1) <この夜、つまり十一月十五の夜、もう深夜の十二時ちかかった> (同上: 6 2) <わたしが目を覚ましたには朝の八時だった> (同上: 7 1) その夜は一晚中わたくしはルーレットやカルタや金貨や金勘定の夢を見た> (同上: 8 1) <ちょうど十時にドアがいきなり突き飛ばされるようにあいて、タチャナ・バヴロヴィナが飛び込んできた> (同上: 8 1) <この一日は破局で終わったが、まだ夜がのこっていた。十二時をすこしすぎたころだった> (同上: 9 1)。同様に第三部の「時間」の経過も三日間である。破局後九日にわたる昏睡後、つまり十一月二十七日から三日間の物語が十三章の構成で展開される。

- 12) 親密性の喪失とその克服のメカニズムの解明は現象学的社会学の課題のひとつである。これについては対話的状况における「他者にたいする働きかけ」(F L), 「他者への態度」(F G) および「わたしの所見」(G L) の循環ループの言説のフロー分析, 伝達・表現・叙述の構造連関分析が必要である。なお「知の要因の親密性と信頼性の問題」(A・シュツツ)はこの構造連関分析の具体化のケースである。Alfred Schütz / Thomas Luckmann, *Strukturen der Lebenswelt*, S.146-153を参照せよ。

## 参考文献

- コンスタンチン・モチューリスキー著/松下裕・松下恭子訳 (2000) 『評伝ドストエフスキー』筑摩書房
- ミハイル・バフチン著/望月哲男・鈴木淳一訳 (1998) 『ドストエフスキーの詩学』ちくま学芸文庫
- ミハイル・バフチン著/桑野隆訳 (2001) 『マルクス主義と言語哲学 - 言語学における』社会学的方法の基本的問題』未来社
- George H. Mead (1934), *Mind, Self, and Society — From the Standpoint of a Social Behaviorist*, The

- University of Chicago Press
- Alfred Schütz (1981), *Theorie der Lebensformen*, Suhrkamp
- Alfred Schütz / Thomas Luckmann (1975), *Strukturen der Lebenswelt*, Luchterhand
- Alfred Schütz (1936), *Das Problem der Personalität in der Sozialwelt (Unöffentlichkeit)*
- Michael Theunissen (1977), *Der Andere: Studien zur Soziologie der Gegenwart*, Walter de Gruyter
- Craig Brandist and Galin Tihanov ed. (2000), *Materializing Bakhtin The Bakhtin Circle and Social Theory*, St Antony's College
- 小林秀雄 (1981) 『ドストエフスキー全論考』講談社
- 小沼文彦訳 (1997) 『ドストエフスキー未公開ノート』筑摩書房
- 清水孝純 (1981) 『ドストエフスキー・ノート』九州大学出版会
- 埴谷雄高「ドストエフスキイ その生活と作品」(『埴谷雄高全集』第七巻1964-1968) 講談社
- 埴谷雄高「討論・ドストエフスキイ全作品」(『埴谷雄高全集』第十二巻 1949-1959) 講談社
- 大江健三郎1988『新しい文学のために』岩波書店
- ドストエフスキイ著/江川卓訳 (2001) 『悪霊』上・下巻 新潮文庫
- ミハイル・バフチン著/伊東一郎・佐々木寛訳 (1999) 「行為の哲学に寄せて・美的活動における作者と主人公」(『ミハイル・バフチン全著作集』第一巻 所収)
- ミハイル・バフチン/桑野隆訳 (1989) 『マルクス主義と言語哲学 - 言語学における社会学的方法の基本問題 - 』未来社
- ルネ・ジラール著/鈴木昌訳 (1983) 『ドストエフスキー』法政大学出版局
- ドストエフスキー/木村浩訳 (2001) 『白痴』新潮文庫
- ドストエフスキー/工藤精一郎訳 (1971) 『未成年』上・下巻 新潮文庫
- 作田啓一 (1988) 『ドストエフスキーの世界』筑摩書房
- Paul Ricoeur, trs. Kathleen Blamey (1992) *Oneself as Another*, The University of Chicago
- Paul Ricoeur (1990), *Soi-même comme un autre*, Edition du Seuil
- L. グロスマン/松浦健三訳 (1980) 「年譜 (伝記, 日付と資料)」: 所収 『ドストエフスキー全集』

別巻, 新潮社  
ドストエフスキー/工藤精一郎・安藤厚訳 (1980)  
『『未成年』創作ノート』: 所収『ドストエフスキー全集』第二七巻 新潮社  
Erikson H. Erikson (1980), *Identity and the Life Cycle* W.  
W. Norton & Company  
Sigmund Freud, Werke aus Jahren 1925-1931, aus:  
*Gesammelte Werke* Bd.14., Fisher Verl.  
フロイト (1928) 「ドストエフスキーと父親殺し」  
(所収『フロイト著作集』3, 人文書院)

Max Weber (1906), Zur Lage der bürgerlichen  
Demokratie in Rußland, in *Gesammelte Politische  
Schriften*  
マックス・ヴェーバー著・林道義訳『ロシア革命論』  
岩波書店1969)  
Fyodor Dostoevsky, A Writer's Diary Vol. 1 (1873-  
1876) & Vol.2. (1877-1881), trs. Kenneth Lantz  
1994 Northan University Press  
(2002. 7. 25. 受理)